
Master Bra !

楽生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Master Bra!

【Nコード】

N0564Y

【作者名】

楽生

【あらすじ】

素敵な彼氏が欲しいと日々夢見る元気な少女と、ふとしたことで知り合った物腰あくまで柔らかい青年の、基本はコミカルで時々超シリアスなファンタジー物語

運命の日の朝は完璧すぎるほどの晴天だった。

雲ひとつ見当たらない爽秋の空。

愛犬のミニチュアダックス、ヌーベル（愛称・ヌウちゃん）との散歩の足取りが、最近はとても軽い。

「ヌウちゃん、ちょっとそんなに急がないでってば！」

はしゃぐ愛犬がかなりの勢いで引つ張るリードをしっかりと握り締め、小走りでその後を追う。ショートヘアの柔らかい髪の毛が、走るリズムに合わせてふわりふわりと何度も大きく揺れた。

現在子犬に引きずりかけられているこの少女、久住理子は、水砂みすず丘おか 私立高校の二年生。毎朝六時に起きてこのヤンちゃんヌーベルを散歩させるのが日課だ。

十月の爽涼とした秋風。その心地よさと爽快感にひたる。

まだ早朝のこの時間帯は外を歩く人もまばらで、公園内は清々しい気配に満ち溢れている。冷たい空気の中に溶け込んでいる陰イオンを胸いっぱい吸い込んでみると、身体の細胞が内部から次々と活性化していく様子が体感できるような気がした。

「おはようございまーす！」

散歩コースにしているこの公園で出会う人々は、大抵決まった顔ぶれだ。その顔馴染みの人々といつものように軽い朝の挨拶を交わし始める。

公園に入って最初に挨拶をしたのはどちらも少し太め体型の熟年

夫婦だ。二人共ふうふうと息を切らせ、額から滝のような大量の汗を流している。

「おう、おはようっ」

「あら、お嬢ちゃんおはよう！ ワンちゃんもおはようね！」

「又ーベルも嬉しそうにワン、と答える。

健康促進のためなのか、はたまたダイエットのためなのか、この夫婦はいつも揃いのジャージ姿でジョギングに励んでいる。

「おはようございまーす！」

次に出会ったのは、こんな早朝からきちんとスーツを着込んでいるにもかかわらず、どこかたびれた様子の眠そうな中年サラリーマン。

「……ああ、おはよう……」

いつもこんな時刻に安息の我が家から職場という名の戦場に出動中ということは、この男性の戦いの場はかなりの遠方にあるのだろ

う。
負債を払い終わる頃にはすでに戦死リタイアしているのではと焦燥させる、一般人には気の遠くなるようなホームローンでも組んでこの郊外に家でも建てたのかもしれない。トボトボと歩くその足取りと背中に深い哀愁が漂っていて、何だかとても痛々しく見えた。そんな心配をしながらその後姿を見送るとすぐに次の顔見知りが見れる。

「あつ、おはようございまーす！」

「おはようさん。あんたはいつも元気だねえ」

朝食前の時間を持て余してここに散歩に来ていると思われる、どことなく物憂げな顔の初老の男性が感心した顔で理子を眺める。

「はい！ それだけが取り柄なんです！」

「そうかい、そうかい。それはいいことだ」

老人はうんうん、と頷く。理子を見る眼差しは可愛い孫娘を見るようなそれと同じで、皺だらけの顔にさらに多くの皺を寄せ集めて

老人はゆったりと微笑んだ。

現在、理子が顔馴染みになっているのはこの四人だ。

欲しかった念願の小型犬をようやく買ってもらい、こうして早朝に公園に来るようになってからもうすぐ一ヶ月が経とうとしている。だが、理子はまだ自分と同じ年代の人間をここで見かけたことが無い。

ヌーベルに引きずられながら園内にある大きな池を一周し始める。ちょうど半周した頃、ヌーベルの足取りがさらに速さを増し、一瞬身体が前のめりになった。

「ちょっとヌウちゃんってば！ そんなに急がないでゆっくりお散歩しようよ！」

だが、前方に大いに自分の興味を惹く対象物を見つけってしまったヌーベルは、飼い主の命令など何処吹く風、といった様子でどんどん先へと突き進んでゆく。

「ちょっとヌウちゃん！」

握っていたリードを力をこめて引っ張った。青いリードがピン、と一直線に張り詰める。

細く非力な理子ではあるが、さすがにミニチュアダックスフンドを抑えることぐらいは何とかが出来る。強引に止められたヌーベルはクウンと寂しそうな鳴き声を一つあげ、恨めしそうに飼い主を見上げた。そして「ほらあれを見てみなさい」と言いたげに少し離れた池のほとりにフィと鼻を向ける。

「なに？ ヌウちゃん、あっちに何かあるの？」

ヌーベルのしている方向に理子も目を向けてみる。

(あ…………)

理子は何度か目を瞬かせた。でもそれは幻ではないようだ。何度瞬きを試してみても目の前のその光景は変わらない。

少し先にある、池の側に設置された背もたれ付きの大きなウッドベンチ。そこに若い男が腰を掛けていた。手には何かの雑誌を持っており、熱心にそれを読みふけっているようだ。遠目だったが、目を伏せて雑誌のページを見つめるその横顔はなかなか整った顔をしている。

早朝にこの公園に来るようになって初めて出会った若い人間、しかも異性。……となると、意思に関係なく鼓動が段々と早まり始めているのも当然と言えば当然の成り行きだ。

ヌーベルが “ ねえねえ理子ちゃん、あの人にも挨拶してみようよ！ ” と言いたげにワン、と強く吠えた。

「う、うん、分かったからゆっくり行こうね、又ウちゃん！」
飼い主の言葉にヌーベルはその胴長の体をブルン、と一度だけ大きく震わせる。まるで「了解しましたよ」と答えたかのようだ。ヌーベルがまた急に走り出さないようにリードに気を配りながらも、少しずつ距離が縮まっていくその人物に遠慮がちに、しかし何度も熱い視線を注ぐ。

なぜか一番最初に頭に浮かんだ彼のキャッチコピーは 「 優しい、らいおん 」。

髪の色は鮮やかなレッドブラウン。少々大胆なカラーリングだ。羽織っているハーフコートが黒なので余計に際立って見える。少々クセのある髪なのか、わずかにウェーブがかかった長めの髪はトップからサイドにかけて緩やかに流れていた。

傍らにはコーヒー缶がある。

でもその缶が今時あまり見かけないロングサイズ缶なので、この人物が甘党なのだということがそこから伺えた。

少しずつ狭まる距離。深呼吸をし、落ち着け、落ち着け、と自分に暗示をかける。

女の子を幾つかのタイプに分類した場合、理子は “ボーイッシュ系” に属する少女だ。身長百六十五センチ。ショートカット。ちよっぴり男勝りなはつらつとした性格。

しかしボーイッシュ系でもそこは十六歳の乙女らしく、彼氏がいたらいいな、とはもちろん思っている。

だが身体の凹凸こそかなり少なめなもの、くりつとした瞳に真っ直ぐに通った鼻筋、そしてきめ細かな肌を持つ理子の容貌を見れば、「素敵な彼氏をゲット」という野望は傍から見るとあっさりと達成できるのではないかと誰もが思うところだ。

だが素敵な異性との遭遇率が極端に悪いのか、元々縁遠い呪われた体質なのか、理子は「ああんかっこいい彼氏が欲しい〜！」と今日もどこかの中心でまだ出会えぬ恋人を求める日々を送っている真っ最中だ。

しかも乙女心は複雑なので、出来れば恋の始まりは劇的に始めたい、という願望が理子にはある。重要キーワードはズバリ、「ドラマチック」。

幾つか凡例を挙げるならば、

「食パン啜えて必死に走っている所を死角から走ってきたカツコイ男の子と衝突して、始まっちゃう恋愛」、

「傘を忘れて雨宿りしている所にカツコイ男の子がそっと差し出してきた傘がきっかけで、始まっちゃう恋愛」、

「小さい時から仲の良かったカツコイ幼馴染が実は自分をずっと思っていてくれたと分かり、始まっちゃう恋愛」

なんていう、ワンパターンストーリーの一場面のような恋愛願望を持っているりするのだ。

だが現実に即して考えてみると、

食パン啜えて人の往来が多い通りを疾走なんて真似は恥ずかしくて出来ないし、

最近は秋晴れが続いていてこのところ雨もなかなか降らないし、ましてやカツコイイ幼馴染なんていう存在もない。

だからこそ今のこのシチュエーションは理子にとってまさに千載一遇の好機であり、チャンスの女神の前髪がまるで南京玉すだれのように目前に垂れ下がってきた、と言っても過言ではない。是非ここでその長い前髪すべてを引っか抜いてスキンヘッドにするくらいの勢いで、力強くがしつとチャンスをつかみたいところだ。

再び熱視線を池のほとりに向ける。

長い足を組んでベンチに座っているその男は完全に手元の雑誌に目を奪われている。理子やヌーベルがほとんど近づいているのにその気配に気付きもしていない。

理子は一人、激しく悩む。

あの青年が何を見ているのかが気になってしょうがない。

それは可憐な少女の胸に湧き起こったちょっとした好奇心。現在歩いている道から一旦横にずれて、後ろ側の道に移動してみた。そして背後から青年の側に近づき、後ろからそつと手元の雑誌を覗いてみる。

「いええええええツ!？」

雑誌の中身を見た理子の口からなんと奇妙な叫び声が上がった。その声に青年が振り返る。

赤茶系のミディアムヘアは昇る朝日に照らされてさらに赤みが増して見えた。その姿はどことなくだが赤いたてがみを持つ若い雄ライオンを彷彿とさせる。だが鳶色の瞳は優しそうな光を湛えていて、百獣の王に例えるにはそこはあまり似つかわしくない部分かもしれない。

至近距離であらためて見ると、童顔気味ではあるが少し下がり目

の柔らかなその顔つきは、横からだけではなく、正面から見ても確実に二枚目の部類に入る顔だ。

顔を強張らせ、固まってしまっている理子を青年は不思議そうに見つめている。

すかさずヌーベルが男の足元に駆け寄り、挨拶代わりに一度だけ吠えた。すると青年は身をかがめ、優しい眼差しでヌーベルの頭をゆっくり二度三度と撫でる。頭を撫でられたヌーベルはちぎれんばかりに尻尾を何度も振り、ハッハッと荒い息を吐きながらその喜びを全身に表し続けている。

青年はもう一度後ろを振り返り、雑誌から理子に完全に視線を移した。

「おはようございます。可愛い犬ですね。貴女はこの辺りにお住まいなのですか？」

それはとても慇懃な挨拶だった。

穏やかな声に丁寧な言葉遣い。ジェントルマンの資質は十二分にありそうだ。

しかし理子は引きつった表情のまま、まだ動けない。

「もしかしてご気分が優れないのでしょうか？ 顔が赤くなってますよ。大丈夫ですか？」

青年は心配そうな表情で理子を気遣う。

「っ、っ、っ……！」

真っ赤な顔で何とか声を出そうとしたが、腹話術人形タロー君のようにただ口をぱくぱくさせるだけ。でも操作してくれる相方が横にいないせいでカツコつかないことこの上ない。そんな理子の様子を青年は微笑んだ。

「変わったお嬢さんですね」

笑うとさらに幼く見える。ライトフレグランスをつけているよう

で、ほのかに香るそれはマスカットの香りによく似ていた。

「……………あつ、あつ、あな……………た……………！」

とりあえずそこまでは声を絞り出せた。しかしその後の言葉は慌てて飲み込む。その方が賢明だと咄嗟に判断したからだ。その代わり、心の中で目一杯に叫ぶ。

（こっつ、この人ッ、きつとヘンタイだあああああ　　ッ！
！）

飲み込んだ言葉を自分の中だけで叫び、理子は男の手元の雑誌に再び視線を向ける。その雑誌は某女性ファッション雑誌で、青年が熱心に読んでいたページは女性の矯正下着がビツシリと掲載されているランジェリーの特集ページだったのだ。

ブラ、ブラ、ショーツ、ショーツ、ブラ、ブラ、ショーツ、ショーツ。ブラ、ブラ……………！！

言つて嫌になるくらい、規則正しく掲載されているランジェリーラインナップ。すべての色を網羅しているのでは、と思わせる、両面ページに広がるパステルからビビットまでのその多彩なカラーバリエーション。もちろんその豊富な色の正体は全部下着。間違いない。

モデルも数人、写っている。当然の如く全員うら若き美女だ。この女性の中の誰かを眺めていたのだろうか。

『ボンツ！・キュツ！・BOMB^{ボム}！』

の非常に分かりやすいキャッチコピーを従えて、モデル達は腰をくねらせ、胸を突き出し、その妖艶なボディラインを惜しげもなく、というよりは見せつけるように晒している。まるでこの矯正下着をつければあなたもすぐにこんなナイスボディになれますよ、とでも言いたいかのように。

） どどどどどうしよう！！ タイヘンだ！ ヘンタイだ！
こんな朝っぱらからヘンタイに遭遇っ！ こんな下着ページを穴
の開くほどじいじいじいっつと見つめていた、超ヘンタイ男に遭遇
っ！ とととっ、とにかく逃げなくっちゃ！（）

脳内判断指令に迅速に従い、とにかく一刻も早くここから逃げよ
う！ と怯えた理子がヌーベルのリードを引っ張った時。

「ああちょうど良かったです」

青年は今まさに頭上に広がっているこの清々しい秋空のような、
一点の曇りも無い爽やかな笑顔で立ち上がった。素材はカシミアだ
ろうか、質の良さそうなハーフコートの裾が大きく翻る。そして青
年はそのまま理子に近づくと明るく言った。

「あの、貴女が今着けておられるブラをちょっと僕に見せていただ
けますか？」

「へへへへヘンターイッ！！」

乙女の叫び声と共に、早朝の公園に威勢のいい平手打ちがこだま
したのはその二秒後のことだった。

ここは水砂丘高校一階にある女子ロッカールーム。
六時限目の体育に備え、ただ今柔肌の乙女達がせつせと生着替え
中だ。

「……理子、今日なんか荒れてない？」

一番仲の良いクラスメイト、親友の井関真央いせまおが白のジャージに腕
を通してながら心配そうに尋ねた。

「どうして今日はそんなにイライラしているの？ 理子らしくない
よ？」

口にヘアゴムを咥え、真央は肩までのストレートの黒髪を両脇で
二つに結わえだした。

制服を入れたロッカーの扉を乱暴に閉じながら、理子は内心で（
イライラもするってもんよ！）と愚痴る。なにせ、カッコイイ男の
人とお話できるチャンス到来かとワクワクしたのも束の間、その相
手が思いつ切りのヘンタイだったのだから。

“ 恋の始まりはドラマチックに！ ” とは確かに願っていた。
そう願ってはいたけれど、その運命の出会いが「貴女のブラを見せ
てくれませんか？」ではあまりにも強烈すぎる。

「今朝ヘンタイに遭遇したのよっ」

不機嫌な理由を重ねて尋ねてくる真央に、一言で答える。

しかしそれがあまりにも大きな声だったので、すでに着替えの終
わっていた理子の周りにたちまち騒々しい女の人垣が出来あがった。
「えっ理子、電車で痴漢に遭ったの！？」

「あれってムカツクよね〜！ 実はアタシも先週お尻触られてるのよ！」

「ウツソ！ 私は一昨日！ ちゃんと通報した？」

「ううん、私は逃げられちゃったの！ でもホント最低だよね、こっちが反撃できないと思ってさ！ 女の敵って感じ！」

「私、次やられたら絶対警察に突き出してやるもんね！ あ〜思い出したらまた頭に来たーっ！ ちよつと理子ッ！ あんたもちゃんとしなさいよ!? こっちにも隙があるからやられちゃうんだからね！」

「えっ!? あ、う、うん。分かった、気をつけるよ……」

思っても見ない方向に事態が展開していったので小さな声で嘘をつき、とりあえず周りに話を合わせた。そこへいいタイミングで休み時間終了のチャイム。

クラスメイト達はお喋りを止めてぞろぞろとグラウンドへ向かい出した。理子はホツと胸を撫で下ろし、親友を促す。

「真央、行こっ」

うん、と真央は頷いたが、理子に向かって小さく手招きをした。

「何？ 真央」

「ちよつと耳かして」

真央は理子よりも身長が低いので理子が身をかめないと耳打ちが出来ない。言われた通りに少しだけ身をかめると。周りに聞こえないようにと気を配った真央の小さな声が鼓膜に届いた。

「……理子、本当は痴漢になんて遭ってないでしょ？」

人間、驚くと一瞬背筋が伸びるのは本当だ。

「な、なんで!？」

「適当に話し合わせたの、ミエミエよ？」

「だ、だって、あの流れじゃ本当のこと言えなかったんだもん！」

「じゃあヘンタイに遭った、って一体どういうことなの？」

「……う、うん、実は今朝又ウちゃんといつもの朝のお散歩に行っただけだね……」

グラウンドへ向かいながら、真子に今朝の出来事の一部始終を話した。説明しているうちにまた朝のあの光景がありありと甦り、勝手に気持ちがヒートアップしてくる。

「……ふうん、確かにちよつと気味悪いわね」

「ちよつとどころじゃないわよっ！ だってブラの写真がこれでもか！ とばかりに載っているページを一人でじーっと穴の開くくらい真剣に見つめててさ、そんで最後に私に向かって“ ブラ見せてくれませんか ” よ！？ もうヘンタイよっ、筋金入りのヘンターイッー！」

ちよつとすれ違おうとしていた男子生徒が自分に向けられた言葉かと勘違いし、慌てて飛びのいている。

「理子、怒るのは分かるけどもうちよつと声抑えて……」

真央は困ったような笑い顔で理子をたしなめた。

「……いい、いけない、つい我を忘れて……」

「でね、理子。“ ブラ見せて ” って言われた後、その人になんて言ったの？」

「なっ、何も言うわけじゃないのぉーッ！」

「理子ッ、シーッー！」

「あー！」

慌てて自分の口元を一旦手で押さえる。声を落として教えたが、ボリユームを下げてすぎて今度は囁き声になってしまった。

「……何も言わないで頼に平手打ちして逃げてきたわよ……」

「ウソ！ 理子ってばスゴイ……」

「だ、だって “ ブラ見せて ” よ！？ すっごく恥ずかしく

て、もう顔から火が出そうだったんだから！ それにいきなり面と向かってそんなこと言われたら普通の女の子なら当然引っぱたくぐらいすると思うけど？」

「でも “ 見せてくれませんか？ ” って聞いてきただけでしょ？ 無理やり見ようとしてきたわけでもないのにいきなり叩いちやうなんて、ちょっとやり過ぎのような気がするな。それにきつと私だったら驚いていつまでも立ち尽くしていそうっ」

のんびりとした性格の真央は理子を見上げてフツツと笑う。

「……そ、そっかな……」

親友からそう言われた理子は、やっぱりあの時いきなり引っぱいたのはちょっとやり過ぎだったかも、と少しだけ反省した。

早朝の公園。

パーンという乾いた音が辺り一円に響き、みるみるうちに赤くなる左頬を手で押さえ、理子を呆然と見つめていたあの青年の顔思い出す。

（ うん、そういえば真面目に頼んできたような気がしないわけでもなかったような……。痛かったかな、あの人。痛かったよね。だって思い切り引っぱいたから、頬、 あんなに真っ赤になっちゃったもん…… ）

「やだ、理子、大変！」

真央が急に焦った声を出す。珍しい。

「早く行かないと授業に遅れちゃうっ！」

気付くとさつきまで近くを歩いていたクラスメイトはどこにも見当たらない。いつの間にか足が止まり、廊下で立ち話をしていたせいだ。

「えーっ！ 遅れたら広部先生にグラウンド三周させられるーっ！」

「急ぎましょ！」

二人は急いで靴を履き替え、外に向かって走り出した。しかし体育教師の広部修ひろべおさむはもうすでにグラウンドに来ており、クラスメイトは全員体育座りをして広部の話を聞いている最中だった。大柄な体格の広部は走ってくる理子と真央に気付くと、隆々とした筋肉がついた両肩をいからせながら二人に向かって大声で怒鳴る。

「くおらあ！ お前達遅いぞ！」

「す、すみませーん！」

「遅刻の罰だ！ そのままグラウンド三周！ とっとな行ってこーい！」

「は〜い……」

「理子〜！ 真央〜！ ファイト〜！」

「しっかりね〜！」

クラスメイト達が叱られた二人を人事だと思っめてめいめいに茶化す。

「真央、ごめんね……。私のせいでグラウンド三周の刑になっちゃって……」

「ううん、色々聞いたのは私だし。私の方こそごめんね。じゃ行こ〜！」

二人はお互いの顔を見てニコツと笑いあい、走り始めた。しかしこの後の体育のことを考えて、体力温存のために走るスピードをお互いさりげなく加減するのは忘れない。

「ふう、あと一周だね、理子」

運動オンチな真央はもう半分ばてているようだ。

「今日の体育がマラソンじゃなくて良かったよね、真央」

「ホント。この後また走らされたら私はビリ確定よ」

「真央は体育が苦手だもんね……………つて！？ ひええええーッ！？」

「な、何？ 急に变な声出してどうしたの、理子？」

「まっ、真央っ！ 走って！ もっと早くっ！」

「え？ どうしたのよ？ だって体力を残しておかないと……………」

「いいからッ！」

理子は真央の手首をがっしりと掴み、スピードを上げて残りの距離を一気に走り切った。

息を切らせながらクラスメイト達の元に戻ると、先ほどまで渋い表情をしていた広部が日に焼けた両腕を組み、一人感動している。

「久住！ お前最後の周に急にペースを上げたじゃないか！ 井関の手を引いてあれだけ早く走れるなんて大したもんだ！」

「い、いえ……………」

三周目を必死に走った理由をこの場で言えない理子はそう言葉を濁すしかなかった。横で真央が理由を聞いたそうな顔をしていたが、「後で」と小声で呟き目配せをする。

その四十分後。

体育の授業が終わりロッカールームに戻る途中で、理子は真央が尋ねてくる前に自分の方から勢い込んで話し出す。

「真央！ いつ、いたのよ、あの男がッ！」

「あの男？」

「朝のヘンタイ男よッ！」

口角泡を飛ばしかなないほどの勢いで理子は叫ぶ。

「さっきグラウンドを走っていた時、フェンスの向こう側にいたの！ 私の方を見て手を振ってた！」

「朝の人ってあの男の人なの？ 私も見たわよ。髪が赤くて背の高い男の人でしょ？ 理子、あの人に学校教えたの？」

「おっ、教えるわけじゃないじゃないっ！」

「じゃあなんで理子がここにいて分かったのかしらね」

アルカリに反応したリトマス試験紙のように理子の顔色が即座に変わる。

「真央っ、もしかしてストーカーだったらどうしようっ！」

「うん、ストーカーではないと思うけどなあ……」

「もうっ、真央は他人事だからそんなお気楽なことが言えるのよっ！」

ロッカールームで絶叫する理子に、「うん、そんなことないよ？」と答えた後、真央は両脇のゴムをほどこき始める。

「そりゃあ、私もさっきの理子の話だけを聞いた時はちょっと不安を感じたけど、でも実際に見てみたら全然そんな雰囲気の人じゃなかったんだもの。だってあの人、とっても優しそうな顔で理子の方を見てたよ？ 単に理子の事が好きになってここに会いに来ただけじゃないの？」

「エッ……！？」

真子がサラリと言い出したその言葉は理子のハートを一瞬強く突いた。でもそれは心地良い痛みだった。

「でももしそうだったら理子ってばいいなあ。だってあの男の人かなりかっこよかったもん！ どっちが先に彼氏ができるかな、なんてこの間私言っただけど、この分じゃ理子にあっさり先越されちゃうかもね？」

この真央の言葉でスイッチがONに切り替わる。

待つてました！ とばかりに乙女妄想回路がここぞとばかりにフ

ル稼働を始めた。

(……わ、私のことが好きになって会いに来た……？ 本当に……？)

理子の脳内のみ限定で只今絶賛公開中の妄想劇場は今、厳かに幕が上がる。

ただし、たった今上演開始になったばかりなのに、すでにクライマックスシーンなのはご愛嬌。

白いタキシードに身を包んだあの赤い髪の男が胸に手を当て、女王に永遠の忠誠を誓う騎士スタイルで理子の目前にスツと片膝をつき、「どうか自分と付き合ってください！」と告白している場面が何度も繰り返し返されている。放っておくと無限に続いてゆく、恐怖のループシアターだ。

しかしそんな夢見心地な時もほんのわずかな時間で強制終了する。

「理子？ 私の話、ちゃんと聞いてる？」

真央の言葉でハッと現実に戻り、理子の妄想劇場は敢え無くカーテンコールを迎えた。

そして舞台衣装をつけたまま急遽楽屋に戻らされたせいで、とても重要だが気付きたくなかった事実はまだ気付いてしまう。

「 ……真央……今、一瞬でも彼氏が出来るかも、なんて夢見た私は馬鹿みたい……」

肩を落とす理子に「どうして？」と、真央が尋ねる。

制服に着替えるために脱いだ体操着のシャツを胸の前で抱え、理子は周りに聞こえないように小声で叫んだ。

「だって、だってよ？ いくら好きになったからって言ったって……！ ……どこの世界に会っていきなり “ ブラ見せて ” なんて

頼んでくる男がいるっていうのよ……!？」
「……あ、そうか、それもそうだよね……うん……」

上半身、水色のブラ一枚でガツクリ落ち込む理子にさすがに上手くフォロースする言葉が見当たらず、真央はそそくさと着替えを始める。

教室に戻るとすぐに帰りのホームルームが始まった。

担任が明日の行事予定をエンエンと話していたが、数分おきに教室の窓ガラスから何度もチラチラと外を見ていた理子はその話のほとんどを上の方で聞いていた。

(……あの人、もしかしてまだあそこにいるのかなあ……。今日はこれで学校も終わりだし、あのまま待ち伏せされていたらどうしよう……)

確かにいきなり引っぱたいた事はほんの少しだけ反省した。それは事実。

だがあの青年が再び目の前に現れ、またしても「ブラを見せてくれませんか」などとフザけた事を言ってきたら、脳から電気信号で送られる条件反射で、あの端正な顔をもう一度引っぱたいてしまいたいような気がしてならなかった。

「神様、どうかもうあのヘンタイがいなくなってますように……！」

帰宅の途につく理子は胸の前で軽く十字を切り、恐る恐る校門の外へと出てみる。

いつもは真央と一緒に下校するのだが、最悪な事に今日に限って生徒会の書記をしている真央が総会に出席することになったため、一人で帰る事になってしまったのだ。

女性の下着に異常な情熱を持っているようなヘンタイに気に入られちゃったのかも、と思うだけでズツシリと気が重くなる。

しかしなぜかここで青空に向けて未練がましく大きなため息を一つ。

朝に引き続き、つい一時間ほど前に見たあの青年の笑顔が脳裏から離れない。正直な所、あの青年のルックスが完全に自分の好みだったからだ。

背も百八十近くはあったし、マスクもいいし、細身だがただ細いだけではなくてどことなく筋肉質っぽい所も全部ひっくるめてタイプだった。強いて難点をあげるとすればあのちよつと派手な赤い髪ぐらいだ。それだけに本当に残念でならない。

大きく息を吸い覚悟を決めて正門を出ると、すぐに前後左右、辺り一帯をか弱き小動物インパラのようにキョロキョロと見渡す。が、周囲に赤い髪のライオン……もとい人影は見当たらない。とにかく今のうちだ。

急いで帰ろうと小走りになりかけたが、高校のすぐ隣にある小さなファンシー雑貨屋で一旦足を止める。シャープペンシルの芯がも

う切れそうだったのをふと思い出したのだ。さつさと芯を買って帰ろうと店先に近づいたが、綺麗に並べてあるたくさんシャープペンシルが目にとまり、何気なくその一つを手取る。

デザインは黒と白のみのシンプルなものから、ノック部分に動物の立体キャラクターがつけられているキュート系の物まで様々なタイプがあった。それぞれのタイプを一通り手に取りあれこれ吟味した後、その中で一番気に入った物を芯と一緒にレジに持っていかうとした時。

「貴女はヒヨコが好きなんですか？」

上から声が降ってきた。

背後にまったく人の気配を感じなかったので、驚きは倍になり、思わずシャープペンシルを取り落としそうになる。今朝聞いたばかりのその穏やかな声には当然まだ聞き覚えがあった。

慌てて振り返ると、朝に横つ面を引っぱたき、体育の授業中にフエンスの向こう側で手を振っていた、例の “ 見かけは爽やか好青年 ” が、

「またお会いしましたね」

などと言いながらいつものまにか目の前に立って微笑んでいる。黒のハーフコートが理子の方に向かって揺れ、またかすかにマスクのトの香りがした。

「今朝の貴女の一発、かなり効きました。おかげで一気に目が覚めましたよ」

自分に失言があったとはいえ、いきなり引っぱたかれたのに怒るところか青年はニコニコと笑っている。責める様子もまったく感じ

られない。

「あ、あなた！ 今日私の体育の授業を覗きに来たでしょ！？」

理子は脅えを悟られないように攻めの口調で応酬しながらも、いざとなつたらこの雑貨屋の中に逃げ込んで助けを求めようと考えていた。

「覗きに来た、とは随分な言われようですね」

しかし青年は特に気分を害した様子も無く、変わらずに笑みを浮かべている。その優しげで穏やかな笑顔にまたしても魅入りそうになつてしまふ。

（ これで今朝「ブラ見せて」なんて変なこと聞いてこなかったら、この人のこと、絶対好きになつてるのにーっ！ ）

地球の裏側にまで突き抜けるぐらいの強さで地団駄を踏みたい気分だ。

「これ、お返しします。貴女、あの後これを落として行かれたんですよ」

青年はハーフコートの左ポケットからスツと何かを取り出した。

「あつ！」

青年の手のひらの上に鎮座しているものを見た理子は思わず大声を出す。

そこには小さなピンク色の小銭入れがあつた。朝の散歩の途中で何か飲みたくなつた場合に備え、散歩の時だけに持ち歩いている物だ。

「あ、ありがとう……」

少々気まずかつたがとりあえず礼を言つてその小銭入れを受け取つた。

しかしそれはそれ、これはこれだ。再びキツと青年を見上げて問い詰めるように尋ねる。

「あ、あなた、まさかストーカーじゃないでしょうねっ！？」

「ストーリーカー……ですか？」

青年はキョトンとした顔で問い返す。

「済みません……その言葉の意味がよく分からないのですが……」

「エエ!？」

理子は驚きの声を上げた。

(信じられない! 今時ストーリーカーの意味を知らない人がいるなんて! この人、テレビや新聞を一切見ない人なの!?)

「ちよつと失礼します」

たった今、小銭入れを出したポケットと反対の場所から、古びた黒い小型の事典のようなものを青年は取り出した。

「載っているかな……」

そう呟きながら中のページをめくり出す。青年が手にしているその本の背表紙がちよつと理子の目線と同位置だったせいで、かすれではいるがその本のタイトルが目に入った。

“ この本は「東方行事艶語録」
東方行事艶語録 ”

タイトルは何とか読むことが出来たが、著者名の金字は完全に剥げきっていて読むことができない。

「あの、よろしければ今の言葉の意味を教えてくださいませんか？」

「どうやら載っていないかったらしい。本を閉じ、青年は真面目に尋ねてくる。

「だ、だから! ストーリーカーっていうのは、特定の人物の後を勝手ににつけまわす人間のことよ!」

理子のこの短い説明で青年はすぐに理解したようだった。

「ああ、分かりました。ここではストーリーカーっていうんですね」

「は……?」

「あ、いえいえ、こちらの話です。失礼しました」

青年は優雅に手を振った後、少し心外だという様子で理子の顔を見る。

「あの、逆にお尋ねしたいのですが、なぜ僕が貴女の後をつけまわしていると思っただのでしょうか？」

「だ、だってどうしてあなた、私の高校が分かったの！？ この中には小銭しか入れてなかったのに……！」

それを聞いた青年は「ああ、なるほどですね」と呟くと笑顔のままで少し身をかがめ、理子の顔を人差し指で指した。目の前に突きつけられたその手は男性とは思えないほど綺麗な手だ。

「それは簡単に分かりました。貴女の名前は “くずみりこ” さんって言うんですね？ そしてこの高校に在籍する二年生です」

嫌な予感 は 現実に。 理子の顔色が青くなる。

その怯えた顔を見れば今の理子の心の中を読むのは誰でも出来る容易いことだ。青年はおかしそうにまた笑う。

「そんなに警戒しなくてもいいですよ。実は貴女のご友人に教えてもらったんです」

「ゆ、友人？ もしかして真央のこと？」

「マオ？ いえ、違います。ほら、貴女がああ公園で毎朝会っておられる、ちよっと寂しそうな顔のお爺さんがいらっしやいますよね？」

「あ」

そういえばあのお爺さんに名前と学校を訊かれたことがある。

「貴女が走り去ってしまわれた後、それが落ちていることに気付いたんです。どうしようかと困っていたら、その方、芝田さんと仰るんですけど、僕らの一部始終を見ていたみたいで、貴女のお名前と

通っている高校を教えてくださいませんか？」

「そ、そうだったの……」

やってしまった、完全な勘違い。とにかく謝らなければ。

「あ、あの……失礼なこと言っちゃってごめんなさい……」

すると青年は優しい表情のまま、小さく首を振る。

「いえ、いいんです。貴女にもう一度お会いしたかったから……」

「エエーッ!？」

青年の意味深な台詞に心臓の鼓動が一気に早まる。

この強烈な右ストレートに、ファイティングポーズを取る間もなくノックダウン寸前の理子は一人あわあわと右往左往するばかりだ。しかしまだ敵のラッシュは終わらない。

「リコさん」

今度はいきなり名前で呼ばれた。

「ははは、はいっ!？」

混乱レベルは最大MAXだ。

乙女妄想回路も許容値を大幅に超えた高負荷により、完全にシステムダウン。リングに投げ込む白タオルが必要かもしれない。

「今朝は本当に申し訳ありませんでした……!」

背筋を伸ばし、直立不動の体勢を取ると、青年は大きく前方に身体を折る。

「完全に僕の配慮不足でした。初対面の女性にいきなりあんなことをお願いしてしまって……。でも悪気は無かったです。どうかそれだけは信じて下さい。お願いします……!」

謝辞と共にさらに身体が深く折れ曲がる。それは角度にして優に四十五度を軽く超えていた。

自分への告白ではなかったことに微妙にガツカリしつつも、真摯

な態度で平謝りするコウの姿を見て理子の中に一つの疑問が浮かび出す。

でもただ「ブラを見たい」という目的でないとするならば、それは一体どんな理由なのだろう。それを確かめたくなくなった。

「あなたの名前はなんて言うの……？」

理子の口調から棘が消えたので青年の顔にホツとした色が浮かぶ。「あ、そうですね。そういえば僕だけ貴女のお名前や年齢を知っているのは不公平ですよ。僕の名前はコウと言います。年は二十四です」

「二十四歳!？」

「はい」

「見えない……」

と理子は呟いた。

童顔のせいか、頑張ってもせいぜい二十歳くらいの容貌だ。

「よく言われます」

コウは照れたように笑った。

さあよいよ本題だ。

「……あ、あのさ、女の子のブラなんか見てどうするの？ 私、今朝は驚いていきなり引っぱたいちゃったけど、今はあなたが単にエッチな興味本位であんなことを頼んできたようにはもう思えない。も、もしかして何か特別な理由があったりするとか？」

この言葉でコウの顔から急に笑みが消えた。そして正面の理子をまじまじと見つめる。向き合ったその顔は恐ろしいほどに真剣で、好みのタイプの男性から見つめられて、自分の視線の先の置き場所が分からなくなる。

右にするべきか、それとも左に流すべきか。

結局恥らいながらわずかに目を伏せた。

「リコさんの仰るとおり、理由はありません。僕にとっては重大な理由です」

どうやらかなり深刻な理由らしい。真面目に語るその顔は百分百本の顔だ。

「ど、どんな理由？」

「僕自身の成長のためです」

「はあ？」

その言葉の意味が分からない。その成長とやらの為に、出会う女性に片っ端から「ブラを見せてください」と頼んでいるのなら、やはりヘンタイの烙印をあらためて押させてもらうことになる。

「でもまさかこんなに早く見つけれられるとは思いませんでした」

そのコウの言葉に理子の視線は再び正面遙か上へと昇る。

「見つけた、って何を？」

「貴女をです」

「は？」

今度の意味も分からない。

「それ、僕にプレゼントさせて下さいませんか」

「え？ それって？」

コウが指差す先は手の中の淡い黄色のヒヨコペンだった。返事が遅れたその際に、ヒヨコはするりと上に逃げていく。

啞然とする理子の手からそれを取り上げるとコウは雑貨屋の中へ入って行ってしまった。やがて三十秒もしないうちに小さな袋を手に戻ってくる。

「どうぞ」

白い紙袋が目の前に差し出される。

雑貨屋のオバさんが紙袋をケチツたのか、どう見ても入りそうにない小さい袋に無理やり商品をつっ込んでるのでヒヨコのノック部分が思い切りはみ出している。

「ちょ、ちよつと待ってよ！ 買ってもらう理由なんかない！ しかも私、あなたを引っぱたいてるのに！ お金ちゃんと払うからっ！」

「いいんです。遠慮なさないで下さい」

「だっ、駄目だっば！ お金払うっ！」

少額とはいえ、買ってもらう理由も無いのに受け取るわけにはいかない。頑なに固辞し、慌ててブルーのスクールバッグから自分の財布を取り出そうとした。しかしファスナーを開けようとした理子の腕をコウの手が優しく掴み、押し留める。

「ひゃあっ!?!」

心臓がビクンと跳ねあがり、思わず叫んでしまった。異性との接触経験値はまだまだ初期値の理子には腕を取られたこの程度でもかなりの刺激だ。

「リコさん」

またいきなり名前を呼ばれ、反射的に「ハイッ？」と答えた声は面白いぐらいに声が裏返っていた。

掴まれている腕の部分が暖かい。

コウの手はとても綺麗な手だが、制服のジャケット越しに伝わる指の間接や節々の感触は確かに男性のもので、そのギャップにまた理子の胸は大きく高鳴る。

「よろしければ明日お時間を取っていただけないでしょうか？」

「明日…?」

「はい。まだ貴女にお話したいことがあります」

「はっ、話があるなら今ここでしてよっ!」

このままだと自分の気持ちごと、コウのペースに流されてしまいたい。虚勢を張り、必死で強気の口調を保つ。

「僕もそうしたいのですが、この後、人と待ち合わせをしていますので……」

コウは残念そうに暮れ始めている秋の空を見上げる。

「リコさん、明日も今日お連れになっていた犬の散歩に行かれるのでしょうか? 明日、今朝と同じ時刻に僕はまたあのベンチにいますのでいらして下さい。では今日はこれで失礼します」

一方的に用件を伝え、去りかけようとするコウを理子は慌てて呼び止める。

「あっ! 待ちなさいよ!」

「明日お待ちしていますねっ」

「ちょっと! だから、まっ、まだ私行っちゃってな……!」

だが待ち合わせに遅れそうなのか、急いだ様子のコウは最後に会釈をし、身を翻すとかかなりのスピードで走り去って行ってしまった。

「足、早っ……!」

コウの俊足に思わず独り言が漏れる。

そして遠ざかる黒コート姿が完全に見えなくなると、理子は回れ右をして家路につき始めた。

明日、行くべきか行かざるべきか。

あのコウという青年がヘンタイでないという確証はまだ取れていないのにノコノコと出かけていくのは危険ではないだろうか。でも今日の真央ではないが、こうしてもう一度話をしてみても、コウが悪い人間にはどうしても見えない。その思いはさらに強くなる。

悩みながら視線を落とすと、たった今プレゼントされたシャープペンシルが視界に入り、紙袋からはみ出している黄色のヒヨコとバ

ツチリ目が合った。

飛び出たまん丸の目の部分があちこちにくると動き、そのお間抜けでひょうきんな愛くるしさに思わず微笑みが浮かぶ。

（ うん、明日目を覚ましてから考えようっ！ ）

胸が少しだけ軽くなった理子は決断を明日に先延ばしにすると、ヒヨコペンを大切そうにスクールバッグの中にしまいこんだ。

ピピピピピピピピ

勤勉、実直さが最大の売りである時の番人は怠ける事など許されない。

本日も “ 自分の目前で睡眠を貪る輩を警報によって起床させる ” という、己に課せられた職務の一つをプログラム通りに忠実に遂行し始めた。

警告音は二秒毎にステップアップでその音量を増してゆく。

実はその前からとくに目が覚めていた理子だったが、とりあえずこのやかましい警報を止めるため、ベッドから半身を乗り出して時の番人の頭頂部を手の平でバシン、と殴打した。

少々暴力的ではあったが、一番効果的な方法で再び沈黙を強要された番人は、渋々と時を刻むという本来の最重要業務に戻る。

「あーっ、どうしようっ！」

アラームを仮停止した後、毛布をガバツと頭からかぶり、その声に出してみた。

明日の朝考えよう、と思って寝たのだが、結局コウと会うかどうかまだ決断できていないのだ。

だがいつもは目覚まし時計の力がなければ起きられない自分が、空が白み始める頃からこっして目を覚ましてしまっていたのはなぜだろう、と考えると思い当たることは一つしかない。

だってヘンタイかどうかまだちゃんと確認してないし！ と自分で自分に言い訳をする。

しかしヘンタイでないとしたら、なぜ「ブラを見せて下さい」などと頼んできたのが皆目見当がつかない。天井を見つめながらぐるぐると思考を巡らせていると、突然脳内に閃光。稲妻が走りまくる。

ある一つの仮説が閃いた理子は頬を上気させてベッドから一気に起き上がった。

（分かったあああああ ツ！！ あれはお仕事だったんだっ！
！ きつとあの人はどこかの有名下着メーカーにお勤めしていて、ここに新作ブラのマーケティングに来ているんだ！ そうよね、あの人かヘンタイなんておかしいと思ったもん！ うんっ、やっぱり行ってみようっ！）

そう決断すれば後は早いものだ。

五分後に再び鳴る予定のアラームを完全に解除し、ベッドから抜け出すと手早く身支度を始める。白のＴシャツに薄手のグリーンのパーカーを羽織り、ジーンズを履こうとして悩んだ。

もう少し女の子らしい格好をした方がいいかなとも悩んだが、結局ボトムはジーンズにする。なんだか浮かれすぎている自分が急に恥ずかしくなってきたからだ。

まだ眠っている母親と弟を起こさないよう、気をつけながら一階に下り、居間の隅にあるお気に入りのタオルケットの上で安眠を貪っていたヌーベルを揺さぶって起した。

「ヌウちゃん起きて起きて！ お散歩に行こ！」

もしヌーベルが人語を話すことができたなら、 “ 朝っぱらから

何をあなたはそんなに張り切っているのですか”、と告げたに違いない。それぐらいに迷惑そうな眠たげな顔でヌーベルはのろのろと半目を開ける。

「ほらほら、行こっ！」

弾む声で長い胴をツンツンと突つくと、ヌーベルはふわあ、と大きなあくびを一つし、プルプルと首を振った。覚醒まで数分を要したがやがてシャキツとした表情に変わる。こちらも準備オーケーだ。

約束の公園は理子の家からすぐ側の場所にある。

結局いつもより二十分以上も早く来てしまったせいで、顔馴染みの人達もまだ誰も来ていないようだ。ベンチへと一目散に向かったが、そこにまだコウの姿は無かった。

「早く来すぎちゃった……」

と脱力した声で呟く。昨日コウが座っていたベンチにストンと座り、目の前の池をなんとはなしに眺め出す。

（ あ、霧……！！？ ）

家を出た時から今朝は少し外の空気が違うとは思っていたのだが、公園内につつすらと白い朝もやが立ち込め始めている。それは少しずつ濃くなり初め、白一色の霧の世界に包まれたしていた。

先ほどからベンチに座る理子を木の陰からじっと見ている人影が

いる。だが、この視界のきかない状態にいる理子はまだそのことに気付いていない。

最近、連日のようにテレビや新聞を騒がす物騒なニュースの数々が頭をよぎり、怖くなってきた理子は急いで帰った方がいいのか悩み出した。でももしこれでコウともう二度と会えなくなったら、と思うとなかなか帰る決心がつかない。

足元でヌーベルが不安そうにキュウンと鳴く。

「……ヌウちゃんも怖い？ やっぱり帰ろうか……」

後ろ髪を引かれる思いでベンチから立ち上がる。その瞬間、背後から右肩にポン、と大きな手が置かれた。

「ひゃああああああ ツ!？」

理子の悲鳴にすかさず反応したヌーベルが、大好きなご主人様をこの身に変えても守ろうとその小さな身体を精一杯に膨らませ、後ろのシルエットに向かって何度も吠え立て、威嚇する。

「リコさんっ、僕です！ コウです！」

叫ぶのを止めた理子が振り返ると後ろにはコウが立っていた。高さの違う缶コーヒーを二本、左手だけで器用に掴んでいる。

ヌーベルは人影がコウだと分かると途端に鳴き止んだ。

「驚かせてすみません、先に声をかけるべきでしたね」

理子の口から漏れた安堵のため息に、コウは自分の非礼を詫びる。「すごい霧ですね。このベンチまで来るのに大変でした。やっとここまで来たんですが、リコさんが帰ろうとしていたみたいだったので、見失わないように慌てて肩を掴んでしまったんです」

コウは微笑むと手の中のコーヒーを一本、理子に差し出した。

「お飲みになりますか？」

「あ、ありがとう」

差し出されたコーヒーはショート缶。それに書かれている文字は
<ほんのり微糖>。

「ブラックの方が良かったですか？」

「ううん、甘い方が好き」

「あ、じゃあこちらにしますか？」

コウは自分の手の中に残っているロング缶を差し出した。

理子は「ううん、こっちでいい」と辞退する。コウがかなり甘めのコーヒーを好きなことはもう昨日の朝の光景でとつくに知っている。渡されたコーヒー缶はホットで、冷え始めていた手にじんわりと温もりが伝わってきた。

コウが先にベンチに腰を下ろしたので少し間隔を空けてその隣に座る。だが座った後でちよっと間隔空けすぎたかな、と後悔した。

「リコさん。僕、昨日一晩考えたんです」

激甘コーヒー缶のプルトップを開けながらコウが先に口火を切った。

「実は貴女に折り入って頼みたいことがあるんです」

即座に理子の瞳が輝く。

「分かってる！ 何かのアンケートに答えるんでしょっ？」

「え？」

コーヒーを飲もうとしていたコウの動きが止まる。

「私、もう分かっているの！ あなたさ、どっかの下着メーカーの社員さんなんでしょ！？ だからモニターを探してるんでしょ！？ 新作ブラの！」

途端にコウは快活な笑い声を上げ、ベンチの背に大きく寄り掛かるとまだ口を付けていないコーヒー缶を右脇に置いた。

「なるほど、見事な推理ですね」

「当たった!？」

「いえ、でもちよつと違います」

「違うの？」

「はい。でも驚きました。ここでは女性に “ ブラを見せて下さい ” と頼むとそうとう鬨聲を買つようですね。つい、自分のいた所の癖で聞いてしまったのですが」

純粹に驚いた。

「じゃっ、じゃあ、あなたが住んでいる所では普通に女の子にああいう事を聞くのっ!？」

「コウ、って呼んで下さい」

穏やかなその声に優しく頼まれるとなんでもいう事を聞いてしまふいそうになる。一応八つも年上なのにいいのかな、と思いつつ、どぎまぎしながら「コウ」と呼ぶ。

名を呼ばれ、コウは満足そうに笑うと、唐突に理子におかしな質問を投げかけた。

「……リコさん、貴女はなにか嫌な事があつたらその事を親や友達、大切な人に話すタイプですか？ それとも気分が晴れるまで自分の胸の中に閉じこめておくタイプですか？」

何かの性格占いだろうか、と思いつつ理子は答える。

「……うん……、楽しい事や嬉しい事なら皆に言いたいけど、嫌な事や辛い事なら言わないで黙っているかなあ……」

「どうしてですか？」

「きつとそれを聞かされた人も同じ嫌な気分になっちゃうだろうから」

「なるほど……」

コウは理子の答えを聞くと空中の霧を見つめた。

「あともう一ついいですか？ ……口は堅い方ですか？」

「う、うん。 “ 誰にも言わないで ” と言われたら大丈夫だと思っけど？」

その返事にコウはもたれかかっていたベンチからゆっくりと身を起す。

「では、これから僕が話すことを誰にも言わないでいただきたいのです。どうか僕とリコさん二人だけの秘密で」

両手の外側がふと温かくなった。

見るとコーヒー缶を持っている自分の両手の上に、さらにコウの大きな片手が重ねられている。

男性に手を握られてまた激しい拍動に襲われ始めた矢先。

「手、冷たいですね……」

そう呟くとコウのは理子の両手を優しくさすり出した。何度も優しく撫でられ、暖められる。

「ひえッ！？ なっ、何してんの!？」

「済みません、僕がリコさんをお待たせしてしまったからですね…

…」

労わるようにコウは手をさすり続ける。

「やっ……」

止めて、と言おうとしたがおかしなことに声が出ない。手をさすられているだけなのに、なぜか身体全体から急速に力が抜けていく。

とにかく触り方が絶妙なのだ。

どうすれば快樂のツボを突くのかを熟知しているかのようなこの

ソフトな動き。その気持ちよさにのぼせた状態の理子はすでにコウのなすがままになってしまっている。

そんな半分意識が飛びかけている理子の耳元に落ち着きのある甘い声が響く。

今にも理子の右頬に唇が触れそうなぐらいの距離にまで顔を寄せ、コウは理子の手をさすり続けながら自分の秘密をそつと囁いた。

「……あのリコさん、驚かないで聞いて下さいね？　実は僕、未来からこの時代に来た、トランスラー時空転送者なんです」

……ひたすらにリカイフノー。何言ってるのかワカラナイ。日本語だったけどワカラナイ。

まったくもって意味不明な電波混じりの今の言葉。

最初は自分をからかっているのかと思ったが、目の前のコウの顔は相変わらずの真剣な顔つきだ。それに元々冗談を言うようなタイプにも見えない。

「急にこんな事を話して信じてください、と言っても難しいことは十分に分かっているのですが……」

コウはさすっていた手を静かに離し、心を落ち着けるためか一つ大きく息を吐く。

「リコさん、これから僕の事をお話ししますから聞くだけ聞いていただけますか？」

「う、うん」

とりあえず頷くと、コウは「まずは僕の職業からお話します」と前置きし、池の方に視線を移すとゆっくりと語りだした。

「僕は “ マスターファンデーション ” という職業に就いています」

「ますたー・ふぁんでーしょんっ？」

「はい。簡単に言うと、女性用下着を作成する請負人です」

初めて聞く職業だ。

「リコさん、僕のいる時代はこの時代と違って、女性用下着ファンデーションの類は企

業の既製生産ではなく、それぞれの請負人、つまり僕らマスターファンデーションが受注する、カスタムハンドメイド完全個人生産の時代になっているんです。だからすべての女性はそれぞれ自分の身体にジャストフィットした、マスターネーム請負人名入りの個別注文下着を身に着けています。僕、この時代のシヨップや雑誌を色々と見てみましたが、やはりこちらのファンデーションに対する意識はまだ少々遅れていると思いました」

長々と饒舌に自分の職業を語り出したコウの目は、自信に溢れ、とても生き生きしている。そしてそんな横顔に思わず話そっちのけで見惚れてしまっている乙女が一人。

「僕の家は祖父の代からの女性下着専門店なんです。家族でそれぞれファンデーションの製作を分担しています。そして僕はその中でも主にブラを専門に作るので、『マスター・ブラ』とも呼ばれています」

もしかしてここって笑うところ？

と内心で思う。

そして、バストサイズを詳しく測ってフルオーダーで作るブラの会社があるという話も聞いたことがあるなあと頭の片隅で考えた。

これで昨日女性下着のページを熱心に見ていた理由も一応は判明したような気もする。

コウがブラに携わる仕事をしているのはたぶん事実なのだろう。

“ 未来から来ましたウンヌン ” は、冗談として。

二人の足元で暇を持て余したヌーベルが、コウの膝の上に乗ろうと足元でジタバタし始めている。

「おいで」

コウは一旦話を切り、ヌーベルを抱えあげると膝の上に乗せる。

そして昨日のように優しく頭を撫でてやった。

「本当に可愛い犬ですね。名前はなんていうんですか？」

「ヌーベルっていうの」

「そうですか。よろしく、ヌーベル」

名前を呼ばれたヌーベルはコウの体に顔をこすりつけ、ふさふさした尻尾を可愛らしく振り続ける。人見知りの激しいヌーベルがコウに懐いているのを見て、理由は分からないがわけもなく嬉しくなった。

「犬ってこんなに可愛いんですね。知りませんでした」

「コウは犬、飼ったことないの？」

「ええ、家の仕事の関係で動物は飼ってもらえませんでした」

おとなしくなったヌーベルは心地よさそうに目を閉じ、コウの膝の上で眠りだそうとしている。コウは小さく息を吐くと再びベンチに背を預けた。

「……ここは本当に素晴らしい所ですよね」

その声にはしみじみとした思いがこもっている。

「周りは緑の自然が一杯残っているし、動物も多い。居住地を選択する自由もあるし……」

理子の住む地域は首都の近郊に位置する地域で、お世辞にも決して緑が多い地域ではない。むしろ少ない方だ。しかしこの状態の街でも「緑が多い」と言うコウに理子は違和感を覚えた。

コウって今までどんな所に住んでいたんだろう？

そう思った時、不意にコウは理子の方に大きく向き直る。

「リコさん。ここまでの僕の話は信じていただけましたか？」

「へ？ コウ、今までの話って半分は冗談でしょ？」

初めてコウの顔に穏やかな笑顔以外の不満げな表情が浮かぶ。

「違います！」

「ううん、絶対に嘘だ！」

「嘘ではないです！」

「ううん、確かにブラのお仕事はしているんだろうけど、でも

未来から来た ” っていうのは作り話でしょ！？」

「だから違います！ どうして信じていただけないのですか？」

「じゃっ、じゃあ証拠見せてよっ！」

「証拠？」

「だってそんな話だけじゃ信じられるわけないじゃない！」

段々口喧嘩の様相を呈してきた。

「証拠ですか……」

眉根を寄せ、コウは考え込み、

「そう、証拠！」

と畳み掛ける理子。

「……間違いなく信じていただける証拠はあるのですが、残念ながら
ら今、彼とは別行動中でして」

「彼って？」

「僕の家族です。名は武蔵むさしといます」

あの宮本武蔵から取った名なんですよ、とコウの追加説明が入る。

武蔵。未来の人間にしてはこれまた随分古めかしい名だ。

「どんな人なの、その武蔵って人？」

コーヒー缶を弄びながらコウはまたしばし考え込む。

「そうですね……一言で言えば信義に厚い、男らしい男ですよ。た
だちよつと口が悪いのがたまに傷ですが」

脳内にゴツくてガサツで「ガハハハ」と大口で下品に笑うような

毛むくじやらの大男が浮かんだ。もしこのイメージ通りなら、理子のタイプからは一番程遠い男性だ。

「分かりました。では武蔵が戻ってくるまでこの問題はお預けにしておきましょう」

これ以上議論しても進展は無いと判断したのだろう、コウは自らそう言い出した。やっと終わった作り話にやれやれ、と思ったが、ここで理子にふとある考えがよぎる。

（もしかしてコウは私との会話をスムーズにするために、一生懸命この冗談を考えてきたのかなあ……？）

もしそうだとしたら作戦は大成功の部類に入る。

未来から来た、という作り話は突飛すぎて面白くなかったけど、少し言い合いもしたせいで、お互いの間に昨日まであった、ぎくしやくした雰囲気が無くなっているからだ。

「晴れてきましたね」

段々と霧が晴れだし、目の前の池に再び朝日が降り注ぐ。水面に乱反射する光に襲われたのか、コウは顔の前に手をかざした。

明るさを取り戻してきた公園内。気配を消し、少し離れた木陰からずっと二人を見ていた一人の男が静かにその場を去ってゆく。

「ところでお時間の方は大丈夫ですか？」

「だっ、大丈夫！ 今日いつもより早く来たし、まだ時間あるから！」

せつかく打ち解けてきたところなのにここで帰るのはもったいない。焦った理子は話題を探す。

「コ、コウの好きな食べ物って何？」

そのあまりのテンプレート的な質問に、口に出した後でへこむ。ばったり道で知人にあった時に話し出すきっかけとして「きょうはいい天気ですね」と言うようなものだ。

「好きな食べ物ですか？」

コウは顎に手を当てて唸る。

「うーん……………たい焼きのしっぽですね」

「た、たい焼きのしっぽ!？」

まさか一番に菓子系を出してくるとは思わなかった。しかもたい焼きのしっぽときている。

「ええ、あの尾の部分の優しいほのかな甘さが安心するというか……………あの部分がつまく中和しているんですね、強烈な餡子の甘さを」

そんな激甘なコーヒーを飲んでいるくせに「ほのかな甘さがいい」なんて言うのがおかしかった。

「あと和菓子も好きです」

次に挙げてきたのもまた菓子系だ。相当な甘党らしい。

「うん、和菓子、美味しいよね。コウが一番好きな和菓子って何なの？」

即座に戻ってくる返答。

「ニヒル・ピンクですね」

「は？」

「あ、すみません……………。えっと何て名前でしたでしょうか……………、あ、度忘れしてしまっただようです。薄いピンク色で、す……………、す……………。確か、“す”がついていたような気がするのですが……………」

…
とかその和菓子名を思い出そうと、コウの左足はタンタンとリズムを刻み始める。

「……もしかして、すあま？」

「ああ、そう、それです！」

理子の口から喉元まで出掛かっていた言葉が出てきたのでコウはスツキリとした顔で頷く。

「なに、その、二、二、……なんだっけ？」

「ニヒル・ピンク虚無的な桃色です。僕の時代では日本語しか名称の無いものには二つ名がつけられているんですよ」

（ まだ続けるんだ、この作り話…… ）

少々呆れてきたが、そこまで言うなら突っ込んでみることにした。

「じゃあ大福はなんて言うの？」

「大福ですか？ インヴォーヴ・スノー内包する雪肌です」

驚いた事に即答してきた。

「……ふ、ふうーん……すごいんだね……」

「武蔵が来なくてもこれで少しは信じてもらえましたか？」

「た、たい焼きは？」

見たそのままの名ですよ、とコウは笑う。

「見たそのまま……？ フイッシュ・スキン・フラワースウィートフィッシュユ？」

「いえ、小麦の魚皮です」

「へえ……」

とにもかくにも驚いた。ただしこの作り話の綿密さに、だ。

「じゃ、じゃあ次の質問ね！」

どうせならとことんテンプレートな質問で押してみることにする。

「嫌いな食べ物は何？」

「うーん、嫌いなものですか……。辛いもの、ちょっと苦手かもしれないです。食べられますが」

「甘いものがそんなに大好きなら当然なのかもしれない。」

「じゃあ次は好きな色？」

「ダークグリーンですね」

「嫌いな色は？」

「レッド、でしょうか」

その答えを聞き、思わずコウの髪の毛を見る。コウは理子の言いたいことがすぐに分かったようだ。

「この髪、目立ちますよね」

「うん。赤が嫌いなのにどうして髪の毛を赤くしているの？」

しかしコウはその質問には答えず、温厚な笑みを見せる。

「……なんだか僕個人の質問ばかりですね。今度は僕からさせて下さい」

質問者の立場になったコウは「好きな色は何色ですか？」と訊ねる。

理子は元気に「黄色！」と答えた。ああ、分かります、とコウは頷く。

「どうして？」

「理子さんは、太陽のようにはつらつとして元気がいいですからね。黄色のイメージを持ってました」

「次に聞くのは嫌いな色でしょ？」

「いえ、違います」

「違うの？」

「はい」

てつきり自分と同じ質問を続けると思っていたが、違うようだ。

コウがベンチの上で急に居住まいを正したので、眠っていた地盤が大きく揺れ、何事かと驚いたヌーベルが起きぬけに一つくしゃみをする。

「あ、すみません、ヌーベル。起こしてしまいましたね」

憤慨したのか、ヌーベルはガサゴソとコウの膝の上から降り、今度は飼い主の元へとよじ登る。理子はヌーベルを抱き上げ、膝に置くと「じゃあ質問はなに？」と問い返した。

コウは理子の胸の辺りにスツと視線を落とす。

「リコさんのバストってこの時代のサイズで言えばBの65でしょうっ？」

「えええっ!? なっ、なんで分かるのっ!？」

ズバリと自分のサイズをコウに言い当てられ、慌てて自分の胸を両腕でガードする。

「服を着ていたってそれぐらいなら分かります。僕、マスター・ブラですよ？」

「……………」

真っ赤になつた理子に、コウが軽くフォローを入れる。

「リコさん、別に恥ずかしがることなどないですよ。僕は仕事で大勢の女性のバストを見てきているのですから」

何気ないそのコウの一言に乙女の胸がズキン、と一瞬だけ強く痛んだ。この痛みは少しも心地良くない。

(…… そっかあ …… コウは女の人の胸を見たことがあるんだ …… しかもたくさん …… 。 そうだよな、お仕事で見るんだろっし、それにモテそうだもんね ……)

「あの、よろしければ今度僕にブラを作らせてくれませんか? 又

ードサイズを測らせていただけたら、リコさんのバストにピッタリとフィットするカップで最高のブラをお作りします」

「い、い、いいってば！ いらなっいらなっいらなっ！！」

全力で、もうこれでもかというぐらいに拒絶する。

自分の胸の小ささにコンプレックスのある理子にとっては、万一口ウに見られたら恥ずかしさできっと悶死してしまうだろう。

理子に激しく拒絶されてコウは残念そうな表情を浮かべたが、それ以上無理強いはしてこなかった。

ただ代わりに。

「失礼します」

と言うや否や、コウは理子の胸に両手を当てた。ごく丁寧に手でカップの形を作った。細くて長い指があまりご立派ではない理子の両胸をパーカーの上から優しく覆う。

鳩尾のすぐ上の部分からほんのわずかだけふわりと持ち上げられるような感触。

とくん、と胸が震えた。

女性の体に触り慣れた感のあるその動きはあまりにも自然で、不覚にも叫ぶ事を完全に忘れてしまう。

「目視だけでは自信が無いのでカップの形をハンド採寸させていただきます。後はアンダーとトップを測らせて下されば、早速リコさんに似合う素敵なブラを作らせていただきます。ご遠慮なさらないで下さいね」

胸から両手を離し、穏やかに笑うコウ。

その台詞でハッと正気に戻る理子。

「ひいやああああああああ　　ッ！！！」

乙女の絶叫の二秒後、霧が晴れた公園内に昨日とまったく同じ打音が高らかに響く。

その音に朝の散歩を終えて自宅に戻ろうとしていた芝田大吾しばた だいごは足を止めた。

「おお、あのお嬢さんがまたやりおった……！　ケンカするほど仲が良い、とは言うが、いやはや、最近の若いモンの愛情表現はなんとも過激なもんじゃなあ……くわばらくわばら」

理子の放った見事な平手の横一閃を惚れ惚れと眺め、芝田老人はほっほっと楽しげに肩を揺らしつつのんびりとその場を去っていった。

水砂丘高校、昼休み直前。

机に頬杖をつき、理子は窓の外を呆けた表情で見ている。

その右肩を軽く叩かれたのは授業終了のチャイムが鳴る三十秒前のことだ。

「私の授業はそんなにつまらないですか？ 久住さん」

頬杖をついていた手を外し、慌てて右上を見上げる。するとそこには社会科担当の男性教師、桐生元きりゅうはじめの憂い顔があった。

「授業が始まってからずっとそうやって窓の外を見てましたよね…」

桐生はかけていた眼鏡を中指でクイと押し上げた後、今度はその指でコツコツと理子の机をリズム良く叩き始める。

「す、すみません！」

両肩を竦め、これ以上ないくらいにまで小さくなる。まるでエア―が完璧に抜けた着ぐるみのようだ。

理子の謝罪に桐生はハアと溜息をつく。

まだ若干二十五歳、涼しげな中に知的なマスクを持つ正統派の桐生は、綺羅星の如く女生徒の人気をその身に一身に集めている教師だ。

一ヶ月前に前任の教師が健康を害し、その後任として桐生がこの高校に赴任してきた時、素敵な先生だなあと理子も思ったことがあった。だが、真央を始めとして周りに恋敵ライバルがあまりに多く、その段違いな競争率の高さに、好きというよりは漠然と憧れている状態だった。……そう、昨日までは。

授業終了の合図である救いの鐘の音が鳴り始めたのでようやく「ツコツ」という音が止まる。

「じゃあ時間になったことですし、今回は特別に大目にみましょう。ただし、あれを社会科準備室に戻しておくこと。いいですね？」

教壇の横にあるA4倍世界地図が入った大きな筒を桐生は指差す。

「はい……」

「ではお願いします」

桐生が教室を出て行くと真央がくすくすと笑いながら理子の机にまでやってきた。

「理子ってばせっかくの桐生先生の授業もそっちのけですーっとな外見てたんだ？」

「う、うん」

「もしかして昨日のあの男の人の事考えてたの？」

「……ッ！」

途端にガシャン、という耳障りな音がした。凶星を突かれ、ギクリとした拍子に筆箱を落としてしまったのだ。だがすでに教室内は昼の準備に向けてざわめき出していたので特に目立つことはなかった。

「あ、拾ってあげる」

真央が散らばった筆記用具を拾い集める。

「わあ、これ初めて見た！ カワイイ！ 隣の雑貨屋さんで買ったの？」

昨日コウに買ってもらったヒヨコペンが真央の手の中でまた目を回している。

「そ、そう」

「ねえ理子。昨日は結局帰りにいなかったんでしょ？ あの赤い髪の毛の人」

真央がまた話題をコウに戻してきたので理子は急いで椅子から立ち上がった。昨日の帰りに会ったことはもちろん、今朝公園で話したことも全部内緒にしているのだ。

理由はもちろん、コウが理子にしてきたあの忌まわしき衝撃行為（胸タッチ）を話せないからである。

「ご、ごめん、真央！ あれを準備室に戻してくるっ！」

「あ、じゃあ私も一緒に行こうか？」

「ううんいいよ。走って行ってくるから！」

「あ、それなら私は待ってた方が早いよね。行ってらっしゃい！」

「うん、すぐに戻ってくるからお昼の準備してて！」

そう真央に伝えると理子は教壇に歩み寄った。そして黒板の右端に立てかけてあった特大地図が入った筒をうんしょ、と持ち上げる。

「重っ………！」

さすが縦横どちらも一メートルを越す巨大地図が入っているだけのことはある。筒の縦の長さなどは理子の背とほぼ変わらない。

抱えるというよりはしがみつくような持ち方で教室のある四階から三階の社会科準備室に向けての長い旅がいざスタートする……はずだった。

ちよっぴりズルをしてほんの少しだけ筒の底をズリズリと引きずりながら廊下を進んでいた時、とんでもない光景が廊下の窓から視界に飛び込んできた。

まさか、と思いつつも急いで窓枠に駆け寄る。

窓ガラスを開け、落ちないように気をつけながら身を乗り出してみると、なんと一つ下の三階の渡り廊下を赤い髪が悠々と移動中。それは呆れるほどにナチュラルで、感心するほど堂々としていた。

(なつ、何やってんのよ、あの男はっ!!)

学内に不審者が侵入した、と誰かが教師に告げにいったは一大事だ。

その場に特大筒を放置すると、理子は三階の渡り廊下目指して走り出した。

下へと続く階段を飛ぶように駆け降りる。

(何しに来たの、アイツ！ 勝手に胸触った事はまだ許してないんだからね！)

確かにコウは一応「失礼します」とは断ってきたが、こっちが許可していなかったのだからあれでは了承を得た事にはならない。

三階に着くと真っ直ぐに渡り廊下に向かって走る。

幸いなことに、教師だけではなく、生徒も見あたらぬ。今は昼休みに入ったばかりで各自教室で昼食にしているからだろう。しかし三階の端には職員室がある。教師と鉢合わせしてないことを祈るのみだ。さらにスピードを上げて渡り廊下への最後のコーナーを曲がる。

「あつりコさん！」

ちょうど廊下を渡りきってきたコウが理子を見て嬉しそうに名を呼ぶ。

全力を使い切った理子はハアハアと息を切らせながら叫んだ。

「コッ、コウ！ あつ、あんだ、何してんのよ、こんな所でっ！」

「はい、リコさんに会いにきました」

なんとも潔い返事だ。その飾り気の無い素朴さが、逆に乙女のハートに直に響く。

しかし今はそんな事を言っている場合ではない。

「どっどっやって校内に入ったのよ！？ 正門の側には守衛室があるのに！」

「正門からは入りませんでしたから」

「じゃあどこから!？」

「南側の大きな建物の裏からです」

「みつ、南側って、まさか体育館の裏！？ だ、だってあそこにはフェンスが……」

水砂丘高校の体育館側には高いフェンスがそびえているのだ。

「乗り越えました」

とコウは事も無げに軽く言う。

それが本当だとしたらなんて身が軽いんだろうと思いつつ、理子はコウの顔をビシッと指差す。穏やかな笑みの相手に向かって激怒するのはあまりいい気持ちがないが、いたしかたない。

「コウ！ 言っとくけど私はまだ朝の事を許してないからね!？」

コウは軽く目を伏せた。

「済みません……。どうしても僕の作るブラをリコさんに着けてもらいたくて……」

「だ、だからいいって断ったでしょ!？」

「リコさん……僕の腕が信用できないのでしょうか？」

喉元に手を当て、真顔で尋ねてくるコウ。

「違うーうー！　そうじゃなくて！　コウの腕が信用出来ないとかい
うんじゃなくて、だ、だから、つまり、はっ、恥ずかしいの！」

「リコさん、どうか恥ずかしがらないで下さい。僕は貴女にピッタ
リのブラを差し上げたいだけです。決してリコさんの胸が見た
いからとかそんな邪な気持ちで言っているわけではありません」

「だ、だからそれは分かってるけど……」

「でしたら是非。ジャストフィットするブラをつけることは身体に
もとてもいいことなんです。合わないブラをつけているとバストの
形も悪くなりますし、肌が赤く腫れたり肩こりがおきることもあり
ます。本来ならバストにつくべき部分が他の部分に流れて、メリハ
リの無い体型になってしまいますよ？」

最後の言葉が思い切り引つかかった理子は、どうせ私はメリハリ
の無い凹凸少なめ体型よっ！　と内心で愚痴る。

コウの言っていることは確かに正論かもしれないが、男性に面と
向かってそんな事を言われるとなんだか凹んでしまう。しかし熱弁
をふるったコウは一步も引く構えを見せない。このままではバスト
をコウに見せることになってしまいそうだ。なんとか上手く断って
ここから追い出さねばならない。

そう考えた矢先、廊下の先から広部の大声が聞こえてきた。

「……しかし藤野先生、あの桐生先生はどうにかありませんかね！
？　俺はあの先生と話す度に頭の血管が毎回ぶちぶちと切れている
ような気がしますよ！」

「はっはっはっ、広部先生、また桐生先生と揉めたんですか？　あ
なたたちは水と油のように離反する関係ですからなあ」

「あの妙にえらぶった態度が気に食わないんです！　この間も廊下
を走っていた女生徒を俺が叱っていたら、桐生先生がスツと現れて、

『もうそれぐらいでよろしいではありませんか。いつもそう大声で生徒達を怒鳴るばかりでは少々能が無いのでは?』なんて、逆に俺に説教かましてきやがってですね……!」

このままだと鉢合わせだ。

「コ、コウ! ちょっとこっちに来て!」

理子はコウの手を取り、一番手近な社会科準備室に飛び込む。

「あのリコさん……!」

「シッ! ちょっと静かにして!」

やがて二人の教師の話し声がすぐ近くまで聞こえてくる。今コウが通ってきた渡り廊下の先には職員室がある。だからこの廊下は教師がよく通るコースなのだ。

まったくよくここまで誰にも見つからないで来れたものだと思子はコウの運の強さに感心する。

すると広部達が歩いて来た反対側からも教師がやってきて、最悪な事に理子達が隠れている部屋の前で立ち話が始まったようだ。

「これは藤野先生に広部先生。今日はどちらでお昼になさるんですか?」

「ああ桐生先生。私達は裏の天竺飯店に行くところですが、よろしければ先生も一緒にどうですか?」

「ふっ、藤野先生!」

広部の慌てた声が聞こえてくる。

「いいじゃありませんか、昼は大勢で食べたほうが美味しいですよ」

「でっ、ですが……!」

どうやら立ち話は長くなりそうだ。

「……どうしよう、出られなくなっちゃった……!」

理子はポツリと呟いた。

「どうしてですか?」

と頭上から暢気な問い。小声で叱り飛ばす。

「何言ってるのっ。コウが見つかったらタイヘンなことになるですよっ」

「僕がこの建物に入るのはいけないのですか？」

「あたりまえでしょっ。部外者が校内に入ってるのが分かったら大騒ぎになるわよっ。だから先生方がいなくなるまでここでやり過ぎさなくっちゃいけないのっ。もっと自分の立場を考えなさいよ、まったくっ」

それを聞いたコウは小さく身じろぎをし、次に発せられた言葉には深い感動の響きが混じっていた。

「リコさん……」

「なに？」

「……じゃありコさんは僕の身を案じてこうして必死に庇って下さっているんですね……？」

「へ？」

身をよける暇も無かった。

制服がほんのわずかだけ、くしゃり、と小さな悲鳴を上げる。

そしてあつという間に包み込まれていた。マスカットの香りと、

コウの腕の中に。

異性に抱きしめられるなんてもちろん初めての経験だ。混乱で思わず「ひえっ!?!」と叫んでしまう。

「あれ？ 今生徒の声が聞こえたような……?」

桐生の声だ。慌てて口を閉じる。

「気のせいではないですか？ 今生徒達は全員昼を食べているからこんな所まで来ないでしょう。ねえ広部先生？」

「ああまったくもってそうですねっ!」

なにやら廊下は不穏な空気が漂っているが、一方のコウはまだ感動のオンパレード中らしい。

「リコさん……ありがとうございます、僕のために……!」

ますます強くぎゅうう、と抱きしめられ、全身の至る所にコウの身体が触れて頭がくらくらしてくる。不整脈が激しすぎて、心臓が二倍くらいに肥大していそうな気がした。

「ちよっ、ちよっとコウ、離してっばっ!」

このままだと本気で悶死してしまいそうなので、必死にコウの身体を押し返し、精一杯の抵抗を試みる。するとコウは少しだけ身を離れたが、代わりに今度は壁に両手をつき、理子をその中にすっぱりと収めた。

「そういえば以前、武蔵に教えてもらったことがあります」

「は？ 何を？」

「惚れた女性を口説く時は “ 一押し二金三男 ”。とにかく押しして押しして押しまくれと」
そう言いながらコウは自分の体ごと理子を壁際に一気に押し付けてきた。

「わあっ!? おっ、押す意味が違っでしようがっ！」

この人ちょっとヘンです！ と誰かに同意を求めたいが、残念なことに今二人の側に佇んでいるのは薄く埃を積もらせた巨大地球儀のみだ。

その時、社会科準備室の扉がガラリと開く。

「誰かいるのかい？」

声の主は桐生だ。

二人がいた場所は戸口からは死角になる部分、地図などの資料が収められているスチール戸棚の影だったのが幸いした。桐生は理子とコウにまだ気付いていない。

息を殺してこの場をやり過ぎさないといけなくなってしまった。

理子はアイコンタクトでコウに “ 喋らないで！ ” と必死に訴える。コウは微笑みながら小さく頷いた。どうやら伝わったようだ。

しかし意志の疎通に安心したのも束の間、今が抵抗出来ない状況なのを見越してか、再び抱き寄せられる。後頭部にそっと手が添えられ、そのまま胸元にまで深く引き入れられた。

驚きで身を強張らせながらも戸口に桐生がいるので声も出せず、糸の切れたマリオネットのようにこれを受け入れるしか今の理子に残された道は無い。

コツコツ、と革靴の音が室内に響き、桐生が社会科準備室内に入

ってきた。

二人はピッタリと抱き合いながら静かに息を殺す。

右の耳元にコウのわずかな息遣いを感じ、心臓が爆発しそうだ。こうして体を完全に密着させているとコウの全身の様子がはつきりと分かり、ますます身体が強張ってくるのを止められない。どうかこの心臓のドキドキがコウに伝わってませんように、と下を向いて祈るばかりだ。

しかももうこれで終わりかと思ったたらまださらに強く抱きしめてくる。

今にも右頬に触れそうな位置にコウの唇が近づいてきたので、その距離を広げるべく、わずかに身をよじった。

すると男性とは思えない滑らかな長い指が理子の顎にそつとあてがわれ、伏せていた顔をクイ、と上げさせられる。強制的に視線を合わせられたその先には、優しい光が佇む双眸が自分を見つめていた。その瞬間、コウが何をしようとしているのかが本能的に分かり、心臓が三段跳びで跳ね上がる。

声を出せない分、理子は必死でもがきまわったが、結局目を閉じる余裕も与えられず、予想通りのことをされる。

「んっ………！」

木枯らしが吹く外をずっと歩いてきたのか、コウの体温は少し低めだ。

だから柔らかくて、少し冷たいのだけれど、でもその中心はだけかすかに熱を持っているような……例えるならコウの唇はそんな感触がした。

唇を優しく押し当ててきた後、次に左の口角から右の口角まで、やわやわと甘噛みされる。そのなんともいえない気持ちよさに気が遠くなりかけ、押し返すためにコウの胸に当てていた手に力が入り、

黒のハーフコートを思い切り握り締めてしまう。するとそれが許諾の合図と受け取ったのか、ますますコウは抱きしめる腕に力をこめ、再び深い口づけをしてきた。

男性とキスをするのはこれが初めてだったが、そんな理子ですらコウの巧みさが分かった。異様に手馴れている感じがするのだ。

「素晴らしいですね……」

窓際にまで歩み寄った桐生は外の見事な紅葉を眺めて一人呟いている。実はその左脇の戸棚の影では恋愛ドラマも真つ青の熱烈ラブシーン中なのだが。

「ほら桐生先生、ここに誰かがいるなんてやっぱり先生の思い違いだったでしょう？ さあ一緒に天竺飯店に行きましょう。早くしないと席が埋まってしまいますよ？」

スキャンをしたらそのまま特売価格が表示されそうな見事なバーコード頭を手で撫でつけながら、藤野が準備室内に入ってくる。

「ええ、ではご一緒させていただきます。……よろしいですか、広部先生？」

桐生は余裕にも取れる落ち着いた笑みを見せ、廊下に残っていた広部は不貞腐れた表情で大きく腕を組んだ。

「あーはいはい！ どうぞどうぞ！」

「ははは、じゃまいりましょうか」

藤野の言葉で準備室の戸が閉まると三人の教師の足音はゆっくりと遠ざかっていった。

「ぶはっ！」

元々体育会系体質で、中でも肺活量には自信がある理子だったが、さすがに一分近くにも及んだ無呼吸接吻は堪えた。勢い良くコウか

ら顔を外し、ぜいぜいと荒い息を繰り返す。

驚いたのがコウの息が何一つ乱れていないことだった。穏やかな眼差しと涼しい笑顔で理子を見下ろしている。

「コウ、あ、あんたねえ……！」

両肩に怒りを乗せ、理子はコウを睨みつけた。

ファーストキスは痺れるようなドラマチックな展開で体験するのが夢だった理子にとって、こんな雑然とした埃っぽい部屋でしかもほぼ強引にされたとあつては憤りが治まらない。

「リコさん、これ受け取って下さい」

「ハ？」

突然顔の前に差し出されたキラキラと光るそれに理子は思わず目を凝らす。

コウの長い指の先がつまんでいるのは真新しい銀の鍵。それが社会科準備室の窓から差し込む陽光を浴びて白い光を放っていたのだ。

「僕が借りている家の鍵です。今朝、これをお渡ししようと思っていたのですが、リコさんが急に僕を引っぱたいて帰ってしまったので……」

「あつ、当たり前でしょ！ コウがいきなり胸なんか触ってくるから！」

思い出したらまたむかつ腹が立ってきた。

「先ほど武蔵から夕方までには戻ってくると連絡が入ったんです。家の住所はこの紙に簡単な地図を書いておきました。ここからならそれほど遠くありませんので、今日学校が終わったらいらして下さいさ

い。もし僕が外出していたら、この鍵を使って中で待っていて下さいね」

コウは一枚のメモ紙と鍵を理子の制服のポケットにスッと入れた。「ではお待ちしてます」

そう告げるとその場に理子を残り、コウは身を翻して準備室を後にしようとする。

理子はキレた。本気で完璧にキレた。

「い、行かないからね！ 絶対！」

身勝手な背中に向けて怒鳴ると去りかけていた足音がピタリと止まった。

コウは再び理子の前に戻ってくる。

「なぜですか？ 今朝リコさんは仰っていたではありませんか、僕が未来から来たという証拠を見せろ、と」

「もうその作り話はたくさんよ！ なんでそう私の都合も聞かないで勝手に自分のペースで物事を進めようとするのよッ！！ なんと言われても絶対に行かないからね！？」

「分かりました」

「へ？ そ、そう……」

あっさりとコウが受諾したので思わず拍子抜けしてしまった。そして今、胸の中をほんの少しだけ寂しい風が通り抜けた気がするのには気のせいだと思い込む。

「ではこれを頂いていきます」

しゅるん、という衣擦れの音。

あっという間に胸元の濃緑のリボンタイが抜き去られる。見事な手際だった。

「武蔵がよく言っているんです。“ 女は約束を破るのが性でそれ

が専売特許みたいなものだから、必ず質草の代わりになるようなものを取っておけ”と。では失礼いたします」

「あーっ！ リボン返してよっ！」

「夕方お待ちしてますねっ」

扉越しに振り返り、質草に取ったりリボンを大きく掲げるとコウは社会科準備室から軽やかに出て行く。

「待ちなさいコウッ！」

慌てて廊下に飛び出したが、その姿はもうどこにも見えない。

（　　）　　嘘！？　　こんな一瞬でいなくなる！？）

ふと、目の前の廊下の窓の一つが開いていることに気付く。

ハッと予感が走り、窓に駆け寄ると中庭をコウが走り去っていくのが見えた。

左手に握られた緑のリボンタイがまるで　　“　　バイバイ　　”　　と言っているかのようにひらひらと楽しげに舞っている。

「……………嘘でしょ……………ここ三階なのに……………」

涼しくなった襟元を押さえ、思わず出たひとり言。

最後に一度校舎の方を振り返り、何とも爽やかな笑顔を最後に残して赤髪のライオンは去っていった。

結局また終始コウのペースに巻き込まれて終わってしまった。どうやら今回も理子の完全なる敗北である。

「絶対行かない、とりあえず行ってみる、絶対行かない、とりあえず行ってみる、絶対行かない……………」

草むらに咲いていたしおれかけのコスモスでなんとなく始めた花占い。

理子がブツブツと口中で呟くその度に、淡いピンク色の花びらが歩道にヒラヒラと儂く舞い落ちてゆく。今日は一段と気温が下がっており、こうして急ぎ足で歩いていてもたまたまに背筋がぞくりとした。

しかし今日はコウのせいで本当に散々な午後だった。

胸元にリボンが無いので担任には「だらしない」と叱責されるし、廊下に放置してしまった世界地図入りの筒をお節介な誰かが職員室に勝手に届けたせいで、桐生にも呆れられてしまった。

トドメはここまで大切にしてきたファーストキスまであんな強引に近い展開で奪われてしまったことだ。まさに “大厄” といっても差し支えないぐらいの内容である。

「とりあえず行ってみ……………」

指先から離れた最後の花びらが、木枯らしに吹かれて後方へと流れていく。

「ああーっ！ “とりあえず行く” になっちゃったあー！」

すぐ側をのんびりと散歩中だった一匹の黒猫がその叫びに驚いて理子のすぐ前を横切る。また何かとんでもない事が起こりそうな予

感がした。

「……やっぱり行った方がいいのかなあ……」

少女は真剣に悩んでいるようだ。コスモスの花びらは全部で八枚と決まっているので、“絶対行かない”から始めれば必ずその反対で終わってしまう、花占いには非常に不向きな花であったりするのだが。

「それにしてもなによ、この住所！」

今度はコートのポケットから一枚の紙を取り出し、不機嫌な乙女は愚痴り始める。

渡された紙に書いてあった地図によると、コウの家はまさに“

ご近所さん”と呼べるレベルの範疇にあったのだ。しかし考えてみればコウと初めて会った公園も理子の家からすぐの場所なのだし、近所に住んでいる可能性は元々大いにあったわけだ。

「行くしかないか……」

はああ、と白いため息が秋の空気に溶け込んでいった。

渋々と決意を固めた理子が自宅に戻ると、母の久住弓希子と玄関でバツタリ遭遇する。ヌーベルも一緒だ。

「あらお帰り、理子」

弓希子は胸元が大きく開いた黒のキャミソールの上にキャメルの革コートを羽織り、ヒップラインを強調した深いスリット入りのタイトスカートを身につけている。腰近くまであるレイヤーの入った長い髪が一際目を引く、美人ではあるが、少々キツめの顔立ちの女性だ。

「お母さん、又ウちゃんとお散歩に行くの？」

これから外に出られるとあって、弓希子の足元でヌーベルは尻尾を振りまくっている。

「違うわ。明日パパが久しぶりに帰ってくるからさ、色々買出しにね。置いていくつもりだったんだけど、この子がついてきたがるもんだから連れて行くことにしたわ」

「それよりお母さん、香水つけすぎ！」

弓希子から漂うパルファムの香りに理子は顔をしかめる。

「あらそう？」

まったく悪びれずに娘に向かって笑うその顔は、パルファム以上に妖艶な色香を放っていた。

「それにお父さんが帰ってきてそんな格好見たらまた大騒ぎするよ？」

「パパと言いなさい」

即座にピシヤリとした言葉が飛んでくる。

「いいじゃないの、今お父さんいないんだから」

「ダメダメ！ 普段から口にしていないといざ本人の前で呼ぶときにうつかり間違えちゃうんだから」

「だってお母さん、私もう十六だよ？ もういいかげんにパパって呼ぶの止めたいよ……」

「しょうがないじゃない、あの人の夢の一つなんだから。“娘には死ぬまでパパって呼んでもらうんだ” って息巻いているからね」

「いい迷惑だよ……」

さつきからため息の連続だ。

理子の父、久住礼人くすみれいとは世の父親にありがちな典型的な娘溺愛タイプの男で、理子にいつも自分の事を “ パパ ” と呼ぶように強制している。もし間違えて “ お父さん ” とでも呼ぼうものならいつもその後は大変な事態になるのだ。

「あ、そうだ。お母さん、ちょっと聞きたいんだけど」

「なによ？」

「あのね、二丁目の権田原ごんたわらさんのお家があるでしょ？」

「ああ、あそこね……。あのお宅がどうかした？」

なぜか弓希子はニヤリと笑う。

「最近あの子の人見かけないけどどうしたの？」

もらった地図に書かれていたコウの家はその権田原家の位置だったのだ。

「あらやだ、理子、あんた知らなかったの！？ あそこの家、ついこの間、すごい修羅場を迎えて大変だったらしいわよっ！？」

途端に弓希子の声が高揚します。とにかくゴシップや噂話の類が三度の食事より好きな女性なのだ。

「あそこのお宅さ、上の息子が春に結婚したでしょ？ で、結婚と同時に権田原さん達と同居しようってことになって家を二世帯に建て替えたじゃない？」

「うん。まだ出来たばかりだよな」

「そう！ で、二世帯住宅が完成していざ同居、になってたった二ヶ月よ、二ヶ月っ！」

「な、なにが二ヶ月？」

「二ヶ月で破綻したのよっ！ その同居生活がっ！！」

鼻息荒く弓希子は叫ぶ。まさに絶叫とも呼べる声量だ。しかし

“ 他人の不幸は蜜の味 ” とはいうが、これほど露骨に喜ぶのもいかなものか。

「まあ元からうまくいくとはあたしも思ってたけどさっ、さすがに二ヶ月でおしゃかになったのには驚いたわね！ なんでも聞いた話によると最初の火種が玄関問題でさ、お嫁さんが玄関を二つにしたい、って言ったのを税金対策で結局一つにしちゃったのが発端みたいよ！？ そこをスタートにお嫁さんに不満がじわじわと積もっていつて、ついに “ もう一緒に住めません！ ” ってドカンと大爆発してさ！ で、結局息子夫婦はあの家を出て、あそこのご夫婦二人で住むには家も広すぎるし、それで売りにだそうとしたんだけど、でもこの不景気で査定があまりつかなかったから結局賃貸で家を貸すことにしたんだって！」

“ 立て板に水 ” どころか “ 立て板に豪流 ” クラスの淀みない強烈な説明に理子は吞まれる。

「そ、そうなんだ。詳しいねお母さん……」

そうか、そこをコウが借りたのか、と状況を把握できた理子が二階へ行こうとすると、

「理子、ところでどうして権田原さんの家のことなんか聞いてきたの？」

「いっいや、別に？ ただなんとなく聞いてみただけ」

「……怪しいわね」

手にしていたハンドバッグを乱暴にシューズボックスの上に置き、

弓希子の目が妖しく光る。

「なっ、なにが!?!」

「母親……ううん、女の勘よ!」

ハイヒールが玄関先に吹っ飛ぶ。靴を脱ぎ捨てた弓希子は長い髪を揺らしながらずかずかと廊下を歩き、理子の前にまで来ると腰に手を当てて娘の顔をじいつと覗き込んだ。

「……男でしょ?」

「ハイ!?!」

「男が絡んでいるわね、今の話題には……。私には分かるのよ。そういう恋愛の香りをかぎ分ける事に関してはね」

恋多き人生を送ってきたらしい弓希子には恋愛に関する嗅覚が恐ろしいほど優れている所がある。それは狩猟の雄、あのポイントに勝るとも劣らない研ぎ澄まされた嗅覚なのだ。

「しかしとうとうアンタにも男の影がちらつくようになってきたか……」

「ちっ、違っつてば! ほら、お母さん、買い物に行くところだったんでしょ!?! 早く行けば!?!」

「……そうね、早くしないとタイムセール終わっちゃっわ。この話題は帰ってきてからじっくり聞かせてもらっわ。じゃあねっ」

その場に何ともいえない甘ったるい香りを残し、弓希子はヌーベルを連れて出かけて行った。

なんとか母の追及をかわした理子は部屋へ戻ると制服を着替える。

「何着ていこうかな……」

と思わず無意識に呟き、慌てて頭をぶんぶんと振った。

「……っ！ ってなんかまるで楽しみにして行くみたいじゃない！
むーっとふくれながらジーンズを履こうとして、そういえば今朝
もジーンズを履いていったな、と思いとどまる。

「お、おんなじ格好で行くのはアレだから、この場合は仕方ないわ
よね！」

チエックのミニスカートを手にまたしてもひとり言だ。

「これでよしっ……っ！」

デニムジャケットを羽織り、出かける前に姿見で念入りな最終チ
エックをした後、理子は自宅を出た。カジュアルブーツの足取りが
少々浮ついていたが、その事実を知らぬは本人ばかりなり、である。

母の弓希子命名、「修羅場の権田原家」に着く。

以前は玄関扉の横にあった表札が無くなっていた。確かに貸しに
出されているようだ。

建てて間もないせいだろうがなかなか立派な二世帯住宅だ。別居
騒動の発端になった玄関は一つだが、玄関上部には小型の監視カメ
ラがついているし、リビングの窓ガラスも二重サッシでしかも防犯
加工が施されていそうな分厚いガラスである。

鍵はコウから貰っているが、いきなりそれを使って入る気にはな

れない。チャイムを押しして反応を待った。ところが応答が無い。

この家の中に入るか、諦めて帰るか、しばし悩む。

だが担任からの追求には “ 風で飛ばされた ” などというかなり間抜けな嘘で乗り切ったが、リボンを返してもらわないと明日また自分が困る羽目になってしまう。

やはりここはあの秘密アイテムを使うべきか。

コウに渡された合鍵を恐る恐る鍵穴に差し込み、捻ってみると口ツクが外れた音がした。

玄関の重い開き扉を遠慮がちに開けるとまず目に飛び込んできたのは正面にある長い廊下。右手の壁にドアがある。これがきつと二世帯の上の階に続く階段への入り口だろう。

「……コウ？ いる？」

玄関内に入りコウの名を呼んでみるがやはり帰ってくる返事は無い。中上がるうかどうしようか再び悩み始めた時、背後の玄関扉が勢いよく開いた。

「リコさん！ いらしてくれてたんですね！」

扉を開けてすに理子の姿を見つけたコウが弾むような声で出迎える。よほど嬉しかったのだろう、輝くような最高の笑顔だ。

今のコウは昼に見た黒のコート姿ではなく、モスグリーンのフライトジャケットと、ジーンズという出で立ちに変わっていた。こういう格好をするとますます二十四には見えない。

先に靴を脱いで玄関に上がると、コウは理子の手を取った。

「さ、上がって下さいー！」

いきなり手を握られて思わずビクツと手を引っ込める。

「あ、すみません。僕、手が冷たいですよね」

コウは今の理子の行動が自分の手が冷えていたせいだと思ったよ
うだ。

「ど、どこに行っていたの？」

どぎまぎしながら理子は尋ねる。

「はい、ブラの視察です」

「あっ、そう……」

そうまで軽やかに言われると、返す言葉も無い。コウは先に立つ
と「どうぞ」と左手側のリビングへと続く扉を開けて理子を招き入
れる。少し迷ったが結局ブーツを脱ぎ、理子は室内に入った。

「すみませんリコさん、まだ武蔵は帰ってきていないようです。今
暖かい飲み物を淹れますのでそこにお座りになっていて下さい」

通されたリビングには人気が無かった。生成り色のソファに座る
ように勧められたが、理子は「お茶なら私が淹れようか？」と申し
出してみる。

「じゃあ一緒に淹れましょうか？」

コウはフライトジャケットを脱ぎながら温厚な微笑みでそう提案
してきた。

ドキリと心が揺れる。

それを悟られないように、持ってきた手土産の袋をとりあえず側
にあったテーブルの上にドサリと置いて先にキッチンへと向かった。
調理台の上にあった銀のポットを手に取りながら、またしてもコ
ウのペースに流されていきそうな自分を叱咤する

() あ的笑顔よ！ あれにいつもやられちゃうのよね！ で
も今度こそきつちりコウに言ってやらないとっ！ ()

「リコさんはコーヒーと紅茶、どちらがよろしいですか？」
続いてキッチンに入ってきたコウがそう尋ねる。

「ど、どっちでもいいけど？」

「じゃあコーヒーにしましょうか」

まだ真新しい食器棚から慣れた様子でコウはドリッパーとコーヒーミルを出す。蓋付きのコーヒーミルに豆が入られ、ハンドルがゆっくりと回りだすと、挽かれた豆の芳醇な香りがキッチン全体に漂いだした。

「この香りってなんか落ち着きますよね」

「うん」

「あとは茶葉を焙じる香りとか。懐かしい気持ちがして気分がリラックスします」

「コウはそれにプラスして甘いものがあれば言う事ないでしょ？」

「ははっ、そうですね。でも知り合って間もないのにリコさんが僕の好みを理解して下さいって嬉しいです」

「そっ、そんなの今朝の話聞いたら誰でも分かるわよっ！」

そんな憎まれ口を叩いてはみたが、コーヒーミルの回転する音だけが支配する静かな空間にこうして二人きりしていると、不思議に気持ち少しづつ落ち着いてきている事に理子はまだ気づいていなかった。

「……いつからここに住んでるの？」

コウの手元を見つめながら理子は尋ねる。

「二週間ほど前からですね」

「その武蔵って人と二人で住んでいるの？」

「はい」

コウはふとハンドルを回していた手を止める。

「そういえば今日はご迷惑をかけてしまったみたいで済みませんでした。リコさんの学校に入ることがいけないことだとは知らなかったもので」

「あっそうだ！ リボン！ リボン返してよ！」

「はい。もちろんお返しします。こうして来ていただけたのですから」

コウは着ていたグレーのハイネックシャツの胸ポケットから緑のリボンを出した。

「な、なに！？ それ、ずっと持っていたの！？」

「ええ、大切なリコさんのものですから無くしたらいけないと思って。ではお返ししますね。どうぞ」

「……！」

胸の奥が不自然に歪んだような気がした。

目の前にリボントイが差し出される。でも素直に受け取れなかった。そうして肌身離さず大切に持っていてくれたのは嬉しかったが。

「リコさん？」

「コッ、コウは勝手だよ!!」

リボンを受け取る代わりに大声で文句を言う。

「そうやって自分で勝手になんでも決めて、そして私を振り回して！ 私にだって 都合つてものがあるんだからね!？」

理子の激しい口調に呑まれたのか、コウは静かに視線を落とす。

「迷惑なの！ すつぐく！」

「……済みません……」

「謝ればいってもんじゃないの！ とつ、とにかく、もうこんなことは二度としないで！ 分かった!？」

「……はい……」

伏せられたコウの瞳は何度も小さく瞬きを繰り返し、かすかに震えている。

雨に打たれて行き場を失った子犬のような、そのあまりにも哀しそうなコウの仕草と表情に、なんだかこちらが加害者になったようで、怒りのテンションが瞬く間に急降下していくのが分かる。

「わ、分かれば今回はもういいけど……」

唇を尖らせ、わずかに顔を逸らしてそう答えた時、フツと身体が浮いたような感覚がしてバランスが大きく崩れる。

今回はマスカットの香りを感じなかった。

キッチンに漂うコーヒートの香りの方が何倍も強かったからだ。

そのせいでコウに抱きしめられていることに気付くのに数秒の間を要してしまった。

「……僕のせいで嫌な思いをなされたのなら謝ります。でも僕は貴女の側にいたいんです……!」

懇願の言葉と共に強く、強く抱きしめられる。だがその抱擁は息はできるくらいの強さなのになぜか上手く呼吸が出来ない。

「リコさん……」

両肩を掴まれ、そっと押し付けられた先は大型冷蔵庫だった。ブウン、というかすかな振動。

冷蔵庫が冷却にいそしむモーターの稼働音が背中越しに伝わってくる。

好きです、というコウの囁き声がそのモーターの音に混じり合う。真正面にあるコウの顔はまだどこか哀しそうな影が残っていて、その表情を見ているだけで胸が詰まった。

「コ、コウ……」

「好きです……、貴女が好きなんです……」

わずかに潤む瞳を揺らしながら、コウは何度も何度も、まるで理子に呪縛をかけるように、目の前で同じ言葉を囁き続ける。

ここまではつきりと想いを告げられ、少女の胸の奥は大きく震えた。

そして何度も想いを囁かれる度に、身体を中心に痺れ、抗おうとする力が頬にかかるコウの熱い吐息であっけなく溶けてゆく。

理子の左頬に一度だけ軽く口付けをすると、コウの唇はそのまま頬の上を滑るように、次の目指すべき場所へと静かに移動し始める。

（ まっ、またこの人にキスされちゃうっ……！ ）

抵抗はしなかったが、咄嗟に強く目をつぶった。

ギョツと固く閉じられた理子の唇にわずかに開いたコウの唇が後数センチで到達しようとした、その時。

二人の背後から妙に甲高い声が突如聞こえてきた。

「おいおいなんだよコウ！ まだお天道さんのある内から女を連れ込んでラブシーンか？ お盛んなこったな！」

(だっ、誰！？)

どうやらキス寸前シーンを第三者に見られてしまったようだ。

理子は身を隠すようにコウにしがみつき、その肩越しに視線を走らせる。だがおかしなことにそこには誰もいなかった。

「今帰ったんですか」

理子の両肩から手を離し、後ろを振り返ったコウはそう声をかけた。

「ああちよいと長居をしすぎて遅くなっちゃった。しかし仏閣巡りはやっぱり最高だなっ！ でよ、コウ。そいつがお前が惚れたっていう女なのか？」

ええ、とコウは頷く。そして理子に向き直ると、

「リコさん。紹介します。彼が武蔵です」

コウの視線に合わせて上を見上げた理子は思わず叫んだ。

「こっ、これがつっ！？」

だがそう理子が叫んだのも無理はない。

まず、第一に武蔵は “ ヒト化 ” の生物では無かった。

直径わずか十センチ少々。

特大カタツムリの殻にそっくりな、うずまき状に膨らんだ、丸みを帯びたそのボディ。

殻の右側には小型の液晶画面のようなものが埋め込まれており、逆側のうずまき面には模様が描かれているのだが、なんとその柄は唐草文様ときている。緑をバックにつる草が四方に伸びているような曲線文様の、大昔に泥棒が盗品を失敬する時に包んだあの風呂敷柄だ。

「コレとはなんだ、コレとはっ！」

理子の頭上で武蔵が怒鳴る。

液晶側にある、二つ並んだ内のレッドランプの方が激しく点灯を繰り返している様子から推測すると、どうやらこれはかなり気分を害しているサインらしい。最初に武蔵の声を聞いた時に妙に甲高い声に感じたのは、それが機械の発する電子音だったからだ。

「リコさん、これで信じていただけましたか？ 僕が未来から来た人間だという事を」

挽かれたコーヒー豆の香りの中でコウが微笑む。

武蔵を見上げ、理子はただひたすら呆然としていた。

信じるしかない光景がそこにある。

このカタツムリの殻のような珍妙な物体が喋るからではない。言葉で人間とコミュニケーションを取ることのできる機械など、この時代にもすでにいる。しかしこの武蔵はそれらとは一線を画す、決定的な違いがあった。

浮いているのである。ふよふよと。

それはラジコン等の動きとは明らかに違う動きで、主翼も回転翼も何も無い、ただの大きな巻貝のようなこの物体の動きは、自然でまさに流れるような見事な浮きっぷりだった。

キッチン内上空をふよふよと巡回しながら武蔵は再び理子に向かって怒鳴りつける。

「おい！ 聞いてんのか、そこの子雌っ！」

「こつ、子雌って私のこと!?!」

「……武蔵」

コウはフウ、と息を吐き、やんわりと相棒をたしなめる。

「女性に対してそのような失礼な言葉を使つてはいけませんよ」

「へっ子雌は子雌だろうが! こいつの分類はヒト化の雌でしかもまだ子供だ! 子雌と呼んでどこが悪い!」

「済みませんリコさん……。本当に口が悪いのが武蔵の唯一の欠点で。どうかお気を悪くしないで下さいね」

困ったような笑い顔を浮かべ、代わりにコウが謝る。

「おい、子雌っ! お前、なんて名なんだ!?!」

理子の顔の前に唐草文様の物体がスウツと急降下してくる。

相手は機械だが、その不躰な態度に理子はキレた。

「な、なによアンタ、エラそうに! 人に名前を尋ねる時はまず自分が名乗るもんでしょ!」

「おっと、それもそうだな! じゃあいつちょ自己紹介つてやつをやつてやるか!」

気合が入ったのか、例のレッドランプが甲高い音と共に一際明るく光り輝く。

「いいか、しつかり覚えとけ! 俺は女性マスターファンデーション下着請負人、蕪利コウの

相棒で、エスカルゴ 通称 “ エスカルゴ ” の武蔵さまだ!」

「え、えすかる……?」

「はい。僕らマスターファンデーションがそれぞれ持つ物差メジャーのことを、エスカルゴ 電脳巻尺というんです」

と、コウの補足が入る。

「そういえばコウの苗字って初めて知った……。 “ かぶり ”
っていうの?」

「はい。ですがそれは苗字ではないんです」

コウがその先を説明しようとするとかささず武蔵が割り込む。

「そこは俺が説明してやろうじゃねえか！ でもコウ、この子雌に言っても大丈夫なのか？」

「ええ。リコさんには僕の補佐人パートナーになつていただきますので」

「ふーん……こいつに決めたのか……」

武蔵は理子の頭のとっぺんから足元まで何度も往復し、まるで品定めをするかのような動きを見せる。

「……お前、胸小せえな」

「なっ！ しっ、失礼ね！」

確かに大きくはないが、こんな唐草文様の珍妙な巻尺風情に言われる筋合いではない。

「武蔵。今の発言を取り消しなさい。本当に失礼ですよ」

「でも俺は事実を言っ……」

「取り消しなさい」

コウが鋭く言い放つ。

たった一言だけではあつたが、普段は温厚な人間がそのような言い方をするとか相手にかかるプレッシャーは非常に大きい。今まで尊大な態度だつた武蔵は少しだけ神妙になつた。

「……わ、悪かつたな」

「済みません、リコさん」

同時に謝られ、理子は「も、もういいけど」とだけ答えた。

なんだかさつきから色んなことがありすぎて頭がついていけてない。

「おう、そうだ。コウ。そういえば俺、この後また出かけるんだよ」

「またマイナーなお寺を見つけたんですか？」

「まあな！ まだ日のある今の内に行くつもりだが、お前が一度戻つて来いつていつから戻つてきたんだ。何の用だつたんだ？」

「リコさんのバストを測りたいんです。武蔵がいないと出来ませんからね」

「ええええええええええーっ!？」

少女の絶叫がキッチンに響き渡る。

そんな理子に向かって、「すぐに済みますからね」とコウは爽やかに笑いかけた。

「ちょっとコウ！ そつ、それどういう意味っ！？」

「じゃあ先に測ってしまいましょうか。ではリコさん、失礼します」
理子の着ていたベロア素材のワイン色のカットソーがコウの手で
あつという間に捲り上げられる。

「ひゃあああああつ！？」

ベビーピンクのブラが “ Yeah! Hello! ” 状態だ。

以前、脳内の乙女妄想回路で空想した演劇の舞台の時のように、
コウは理子の前に片膝をついて跪いてはいる。が、口にする台詞は
「どうか自分と付き合ってください！」ではもちろん無い。
代わりに、

「採寸はすぐに終わりますからね」
とニツコリ微笑み、華麗に言つてのけてくる。

（ さ、さつきあんな殊勝な顔してたくせに、この人、私の
言ったことを全つ然分かつてないじゃないのおおおーっ！！）

先ほどのコウとのやり取りがすべてムダだった事を悟った理子は、
慌ててたくし上げられたカットソーを必死に引き下ろす。
「だからブラはいらないって言ってるでしょーっ！」

すると「おい子雌！」と頭上から声。

「お前、コウにブラを作ってもらえるのがどれだけありがたいことか分かってないな？ いいか、よく聞け。コウのブラが欲しい客はな、普通は最低で一ヶ月、シーズンによっては三ヶ月近く待たされるんだぞ？ それをこうしてすぐに作ってもらえるんだ、少しはありがたがれよ。まったく無知とはいえ、罰当たりなヤツだな」
「そっそんな事知らないわよっ！ とにかくいらないっ！ わっ私、もう帰るから！」

貞操の危機を感じた少女はキッチンから脱出する。

（ コウのバカバカバカッ！ 信じらんないっ！ 何考えてんのか分かんないよ！ ）

「おい、子雌が逃げたぞ。どうすんだ、コウ？」

「困りましたね……。正確なサイズが分からないとブラは作れませんし……」

キッチンから聞こえてくる暢気な話し合いを背に、玄関まで一気に走る。カジュアルブーツを急いで手に取ったその時。

「じゃあ実力行使しかねえよなあ」

武蔵の声だ。

間髪入れずにシュン、と鋭く短い音が鳴り、それは廊下の空気を真つ二つに切り裂く。

「きゃあああーッ!？」

一瞬にして身体の自由が奪われた。

廊下の奥から飛んできた白い紐のようなものが理子の上半身にグルグルと巻きついたせいだ。

(な、なにコレッ!?)

よく見るとただの紐ではない。色々な数字や記号、それに線が書き込まれている。

そしてこの紐の正体が巻尺の紐、メジャーテープな事に気付いた直後、理子の身体はあつという間にグイグイとキッチンへと連れ戻される。たかが直径十センチほどの巻尺のくせにすごいパワーだ。

「お帰りなさい、リコさん」

「手間かけさすんじゃねえよ、子雌」

キッチンで再びご対面した兩名の台詞だ。

「やだやだやだー!!! 絶対にやだー!!! コウのエッチ!!! スケベー!!! ヘンターイー!!!」

生バストを見られたたくなくて全力でジタバタと暴れたが、上半身に巻きつけられた巻尺はびくともしない。もうこうなってはカゴの中の鳥、どう足掻いても逃げられない、子牛が荷馬車で売られてゆく哀れなドナドナ状態である。

「暴れてたら測れねえじゃんかよ。まったく面倒くせえ子雌だな」

なぜか武蔵は縛っていたメジャーテープをここでハラリと緩める。身体に自由が戻り、やった! と思っただ瞬間、今度はテープは手首だけに巻きついた。そして一気に急上昇する。

「ひゃあっ!?!」

両手が高々と上に上げられ、爪先こそ床にかろうじてついているものの、理子は半分吊るされた格好になってしまった。

「なっなにすんのよっ!?!」

「ほれコウ、子雌の手を押さえておくからパッと済ましちまいな

早くしないと日が落ちちまう。寺に行けなくなるじゃねえか」

「はい。では急いで」

コウが再び理子の前に歩み寄る。

「やっ、やめてってばコウ!!! お願いっ!!!」

理子は真つ赤な顔で必死に頼み込むが、返ってきた答えはまたしても、

「大丈夫ですよ。すぐに済みますので」

だった。

本当に、呆れるほどまったく分かっていない男がここにいる。

「だからそういう問題じゃないのーっ!!」

しかし理子がいくら騒いでも場の流れは変わらない。コウは軽く一礼すると、採寸を行う前の最初の挨拶を口にする。

「では始めさせていただきます」

再びカットソーがふわりとたくしあげられた。

「ひえええっっ!!!」

「武蔵。クロスピンありますか?」

「ああ。ほらよ」

唐草文様部分がパクリと開き、武蔵の体内から小さなクリップのようなものが飛び出てくる。

「幾ついるんだ?」

「三……いえ、四つ下さい」

武蔵の内部に収納されていたそのクリップを使い、コウは捲り上げた理子のカットソーが落ちてこないように上部で次々と留め始める。

そしてカットソーを留め終わった後、理子の背中にコウの手が回った。

「やちゃやちゃめてってばーっ!!!」

ほんのわずかだ。

それは時間にして一秒かかったか、かからないか。たぶんかかっていないだろう。それほど見事な外しっぷりだった。親指と人差し指、たった二本を合わせて軽く捻らせただけでパチン、と簡単にホックが外れる音がする。

(プロだ……。やっぱりこの人、ブラのプロだ……！)

そのテクニクのアマリの見事さに、一瞬そんな感動すら湧いたほどの早業だった。

「あ、武蔵すみません、やっぱりもう一本クロスピン下さい」「おう」

そして武蔵が追加で出した五本目のクロスピンがカットソーと一緒にしつかりと留めたのは、どうみても自分のものと思われる見慣れたベビーピンクのブラだった。

……………と、いうことは。

理子は恐る恐る真下に視線を向ける。しかし、たくしあげられたカットソーとブラで自分の胸は見えなかった。でも妙にスースーした感触が肌を刺す。

(……ハ、ハダカ……見られてる……の……？)

羞恥のキャパシティを大きくオーバーしているこの非常事態に、少女の脳内はその活動を半分以上放棄してしまった。そんな理子の

耳に穏やかなコウの声が響く。

「武蔵、まずはアンダーから行きます」

「今、子雌に一本使っちゃまってからスピアの方でいいな？」

「ええ、お願いします」

「そらよ」

パシユ、という音と共に武蔵の体内から二本目のメジャーテープが飛び出す。利き手で器用にテープをキャッチしたコウは滑らかな動きでそれを理子のアンダーの部分に当てた。

「……64ですね」

コウがそう呟いたのと同時に武蔵の体内がピツという音を発した。

「次はトップです。こちらは武蔵が測って下さい」

「了解」

武蔵自身の操作に切り替わったため、スピアテープが息吹を得たように独自の動きを始める。そして両手の空いたコウは理子のバストを下から包み込むようにクイと持ち上げた。

「いいえええッ!？」

バストに直接コウの手が触れたのを感じ、おかしいな奇声を上げてしまう理子。

(さっ、触られてる!？ もしかして直に触られてるッ!
?)

自分のバストを持ち上げているその手はまだ少し冷たかった。つい先ほど玄関で握られた時と同じ温度。やはりどうみても触られている。

「リコさん、緊張なさないで下さい。立った状態でバストを測ると重力でバストが下垂してしまうのでこうして正しい位置に合わせ測るんです」

にこやかな説明が真下から聞こえてきた。

バストの最も隆起している部分にスルスルとテープが絡みつき、またピツという電子音。

「トツプ測ったぜ、コウ」

「ではいつものように記録しておいてください」

武蔵は「了解」と言つと二本のメジャーテープを素早く体内に収納した。

両手の拘束が解かれて理子に自由が戻る。

だが身体と精神、その両方に受けたあまりのダメージに、理子は冷蔵庫に背中を預けながらキッチンの床にペタンと座り込んでしまった。

コウは跪いていた身をさらにかがめ、理子のカッタソーにつけていたクロスピンを一つずつ外し出す。

「お疲れ様でした！ 胸のカーヴもハンド採寸出来てますし、明日までにリコさんのブラをお作りしてお届けしますね！」

しかし放心状態の理子は返事をしない。するとクロスピンをすべて外し終えたコウは、更なる手伝いを申し出る。

「リコさん。よろしければそのブラ、僕がつけましようか？」

この言葉が怒りのビッグ・バンへの最終起動スイッチだった。

半停止していた理子の神経回路がこの瞬間に一気に繋がる。

「コウのバカアアアアアアア ツツツ！！！」

たぶんこれが今までで一番スナップが効いた一撃だ。

またしてもコウの頬を渾身の力をこめて思い切り引っぱりたい後、

理子は服を元通りに引き下げ、リボンを掴むとこの修羅場ハウスから飛び出していった。

そして理子のいなくなったキッチンで男一名と機械一体の会話は続く。

「……しっかしやたらと気の強い子雌だな。今の絶対全力で引っぱたいてきたぞ？」

「まあ慣れてますんで。これで三度目ですから」

リコの赤い手形がついた左頬をさすりながらコウは余裕の笑みだ。

「でもお前の好みがああいうタイプだったとはなあ」

「意外でしたか？」

腕を組んでキッチン台に寄りかかり、そう武蔵に尋ねるコウの声はかすかに笑いを含んでいる。

「……いや、納得だね。なにせお前は真正のマゾ体質だからな」

「ははっ、相変わらず失礼ですね、武蔵は」

コウは身体をくの字に曲げて軽い笑い声を上げた。

「大体よ、あの子雌に惚れたきっかけが今みたいに顔を引っぱたかれたからなんだろう？ それに今のビンタだってお前ならいくらでも避けられたはずなのにわざと喰らってたじゃねえか」

「いえいえ、リコさんの手のあまりの速さにまったく避けられなかつたんですよ」

「嘘つかったの！ ま、いいや。じゃあ俺はまたちよっくら出かけてくるぜ」

再び外出しようとしてキッチンからリビングへ浮遊移動した武蔵は空中で一旦停止する。メジャーテープ収納口のすぐ上部にあるレンズが何かを捉えたようだ。

「おいコウ。これなんだ？」

「なんですか？」

「これだよこれ」

リビングのテーブルの上に置かれている白い紙袋を武蔵はメジャーテープで指す。

「ああ、そういえばリコさんが持ってきていた物ですね。一体何でしょう。忘れ物でしょうか」

「中身はなんだ？」

スピアのテープも出し、武蔵は二本のメジャーテープを手のように器用に動かして紙袋をがさごと開ける。中にあったのは六匹のたい焼きだった。

フイッシュスキン・フラワー

「なんだ、“小麦の魚皮”じゃねえか」

「ああ、これは一石庵いっごくあんさんのたい焼きですね。ここのたい焼きってとても美味しいんですよ。白餡タイプのたい焼きが特に美味しいんです」

「ふーん、一応これを手土産を持ってきたってことか。多少は気が利くところがあるじゃねえか」

「そうですね。本当にいい娘ですよ」

袋からスイート風味の小麦魚を一匹取り出し、コウはそれを優しい眼差しで見つめる。

「そうだ、コウ。今の子雌でお前の顧客数がとうとう千になったぞ。今度祝いでもやるか？」

「ああ武蔵。リコさんのデータはN o . 0 に書き換えて置いて下さ

いね」

「何いつ！？ トット最優先にか！？」

「はい」

「コウ、お前マジで言ってるのか!？」

「ええもちろんですよ」

「ほお……」

今回はレッドランプではなく、その一つ上のブルーランプがゆっくりと点滅を始める。

「……じゃあこの先、お前が為すべき事は一つだな、コウ」

「はい。分かっています」

コウは力強く頷く。

「でもあの子雌はじゃじゃ馬そうだから手懐けるのに苦労しそうだな」

「いえいえ、道程が険しいほど燃えますよ」

「ヘッ、ヒヨツ子が随分と頼もしい事言うようになったじゃねえか

！ よーし、じゃあ今回も俺からのありがたい人生必勝アドバイスをくれてやる。いいか、 “ 将を射んとすれば…… ”

「まず馬を射よ、ですね」

「分かっただけじゃねえか！ ま、せいぜい頑張りな」

「ええ、頑張ります！」

左頬に赤々とした理子の手形をつけ、少々白餡がはみ出しているたい焼きの尾を口に、どこまでも爽やかに笑うコウであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0564y/>

Master Bra !

2011年11月9日01時07分発行